

「歴史」 指導の手引き

2017年 第1回試験

「歴史」 指導の手引き

2017年 第1回試験

ディプロマプログラム (DP)

「歴史」指導の手引き

2015年1月に発行の英文原本 *History guide* の日本語版
2015年8月発行、2016年3月改訂

本資料の翻訳・刊行にあたり、
文部科学省より多大なご支援をいただいたことに感謝いたします。

※日本語訳版の提供にあたって 本資料中の歴史用語については、日本の高等学校学習指導要領で必修科目とされる世界史A及び世界史Bで使用されている用語に準じたものとしており、また、一条校で本資料を用いて指導を行う際には、必修科目とされている世界史Aおよび世界史Bとの整合性にも十分留意をして頂くようお願いいたします。

非営利教育財団 国際バカロレア機構
(International Baccalaureate Organization)
15 Route des Morillons, 1218 Le Grand-Saconnex, Geneva, Switzerland

発行所
International Baccalaureate Organization (UK) Ltd
Peterson House, Malthouse Avenue, Cardiff Gate
Cardiff, Wales CF23 8GL, United Kingdom

ウェブサイト : www.ibo.org

© International Baccalaureate Organization 2014

国際バカロレア機構 (以下、「IB」という。) は、より良い、より平和な世界の実現を目指して、チャレンジに満ちた4つの質の高い教育プログラムを世界中の学校に提供しています。本資料は、そうしたプログラムを支援することを目的に作成されました。

IBは、資料の中で利用する多様な情報源について、情報の正確さと信憑性を確認します。ウィキペディアのようなコミュニティーベースの知識源を使用する際には、特に留意します。IBは知的財産の原則を尊重し、利用する著作物すべてについて刊行前に著作権者を特定し、許諾を得るよう常に努力します。IBは、本資料で利用した著作物に対して許諾をいただいたことに感謝するとともに、誤記および遺漏がありました場合には、可能な限り早急に訂正いたします。

本資料に関するすべての権利はIBに帰属します。法令またはIB内部規則もしくは方針に明記されていない限り、IBの事前承諾書なしに、本書のいかなる部分も、形式と手段を問わず、複製、検索システムへの保存、送信を禁じます。詳しくは www.ibo.org/copyright をご覧ください。

IBの商品と刊行物は、IBストア (<http://store.ibo.org>) でお求めください。ご注文については、販売・マーケティング部にお問い合わせください。

電子メール : sales@ibo.org

International Baccalaureate、Baccalauréat International および Bachillerato Internacional は、International Baccalaureate Organization の登録商標です。

IBの使命

IB mission statement

国際バカロレア（IB）は、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的としています。

この目的のため、IBは、学校や政府、国際機関と協力しながら、チャレンジに満ちた国際教育プログラムと厳格な評価の仕組みの開発に取り組んでいます。

IBのプログラムは、世界各地で学ぶ児童生徒に、人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続けるよう働きかけています。



IBの学習者像

すべてのIBプログラムは、国際的な視野をもつ人間の育成を目指しています。人類に共通する人間らしさと地球を共に守る責任を認識し、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する人間を育てます。

IBの学習者として、私たちは次の目標に向かって努力します。

探究する人

私たちは、好奇心を育み、探究し研究するスキルを身につけます。ひとりで学んだり、他の人々と共に学んだりします。熱意をもって学び、学ぶ喜びを生涯を通じてもち続けます。

知識のある人

私たちは、概念的な理解を深めて活用し、幅広い分野の知識を探究します。地域社会やグローバル社会における重要な課題や考えに取り組みます。

考える人

私たちは、複雑な問題を分析し、責任ある行動をとるために、批判的かつ創造的に考えるスキルを活用します。率先して理性的で倫理的な判断を下します。

コミュニケーションができる人

私たちは、複数の言語やさまざまな方法を用いて、自信をもって創造的に自分自身を表現します。他の人々や他の集団のものの見方に注意深く耳を傾け、効果的に協力し合います。

信念をもつ人

私たちは、誠実かつ正直に、公正な考えと強い正義感をもって行動します。そして、あらゆる人々がもつ尊厳と権利を尊重して行動します。私たちは、自分自身の行動とそれに伴う結果に責任をもちます。

心を開く人

私たちは、自己の文化と個人的な経験の真価を正しく受け止めると同時に、他の人々の価値観や伝統の真価もまた正しく受け止めます。多様な視点を求め、価値を見だし、その経験を糧に成長しようと努めます。

思いやりのある人

私たちは、思いやりと共感、そして尊重の精神を示します。人の役に立ち、他の人々の生活や私たちを取り巻く世界を良くするために行動します。

挑戦する人

私たちは、不確実な事態に対し、熟慮と決断力をもって向き合います。ひとりで、または協力して新しい考えや方法を探究します。挑戦と変化に機知に富んだ方法で快活に取り組みます。

バランスのとれた人

私たちは、自分自身や他の人々の幸福にとって、私たちの生を構成する知性、身体、心のバランスをとることが大切だと理解しています。また、私たちが他の人々や、私たちが住むこの世界と相互に依存していることを認識しています。

振り返りができる人

私たちは、世界について、そして自分の考えや経験について、深く考察します。自分自身の学びと成長を促すため、自分の長所と短所を理解するよう努めます。

この「IBの学習者像」は、IBワールドスクール（IB認定校）が価値を置く人間性を10の人物像として表しています。こうした人物像は、個人や集団が地域社会や国、そしてグローバルなコミュニティの責任ある一員となることに資すると私たちは信じています。

目次

はじめに	1
本資料の目的	1
ディプロマプログラムとは	2
「歴史」の学習	6
ねらい	11
評価目標	12
シラバス	13
シラバスの概要	13
シラバスの内容	18
評価	64
ディプロマプログラムにおける評価	64
評価の概要－標準レベル（SL）	68
評価の概要－上級レベル（HL）	69
外部評価	70
内部評価	76
指導の方法・学習の方法	84
ディプロマプログラム「歴史」の指導と学習のアプローチ	84
付録	88
指示用語の解説	88
参考文献	89

本資料の目的

本資料は、「歴史」を学校で計画、指導、評価するための手引きです。「歴史」の担当教師を対象としていますが、生徒や保護者に「歴史」について説明する際にも、ご活用ください。

本資料は、オンラインカリキュラムセンター（OCC）の教科のページで入手できます。OCC（<http://occ.ibo.org>）は、パスワードで保護されたIBのウェブサイトで、IBの教師をサポートする情報源です。また、本資料はIBストア（<http://store.ibo.org>）で購入することもできます。

その他のリソース

教師用参考資料や科目レポート、内部評価のガイダンス、評価規準の説明といったその他のリソースも、OCCで取り扱っています。過去の試験問題とマークスキームはIBストアで取り扱っています。

OCCでは、他の教師が作成したり、活用している教育リソースについて情報を得ることができますので、ご活用ください。教師たちによるウェブサイトや本、ビデオ、定期刊行物、指導案などの役立つリソースも提供されています。

謝辞

IBは、本資料を作成するにあたり、時間やリソースを惜しみなく提供して下さった教育関係者や提携校の皆様に感謝の意を表します。

2017年 第1回試験

ディプロマプログラムとは

ディプロマプログラム（DP）は16歳から19歳までの大学入学前の生徒を対象とした、綿密に設計された教育プログラムです。幅広い分野を学習する2年間のプログラムで、知識豊かで探究心に富み、思いやりと共感する力のある人間を育成することを目的としています。また、多様な文化の理解と開かれた心の育成に力を入れており、さまざまな視点を尊重し、評価するために必要な態度を育むことを目指しています。

DPのプログラムモデル

DPは、6つの^{グループ}教科が中心となる核「コア」を取り囲んだ形のモデル図で示すことができます（図1参照）。DPでは、幅広い学習分野を同時並行して学ぶのが特徴で、生徒は「言語と文学」（グループ1）と「言語の習得」（グループ2）で現代言語を計2言語（または現代言語と古典言語を1言語ずつ）、「個人と社会」（グループ3）から人文または社会科学を1科目、「理科」（グループ4）から1科目、「数学」（グループ5）から1科目、そして「芸術」（グループ6）から1科目を履修します。多岐にわたる分野を学習するため、学習量が多く、大学入学に向けて効果的に準備できるようになっています。生徒は各教科から柔軟に科目を選択できるため、特に興味のある科目や、大学で専攻したいと考えている分野の科目を選ぶことができます。



図1

DPのプログラムモデル

科目の選択

生徒は、6つの教科からそれぞれ1科目を選択します。ただし、「芸術」から1科目選ぶ代わりに、他の教科で2科目選択することもできます。通常3科目（最大4科目）を上級レベル（HL）、その他を標準レベル（SL）で履修します。IBでは、HL科目の学習に240時間、SL科目の学習に150時間を割りあててることを推奨しています。HL科目はSL科目よりも幅広い内容を深く学習します。

いずれのレベルにおいても、さまざまなスキルを身につけますが、特に批判的^{クリティカル}な思考と分析に重点を置いています。各科目の修了時に、学校外で実施されるIBによる外部評価で生徒の学力を評価します。また、多くの科目で、科目を担当する教師が評価する課題^{コースワーク}を課しています。

プログラムモデルの「コア」

DPで学ぶすべての生徒は、プログラムモデルの「コア」を形づくる次の3つの必修要件を履修します。

「知の理論」（TOK : theory of knowledge）では、批判的^{クリティカルシンキング}な思考に取り組みます。具体的な知識について学習するのではなく、知るプロセスを探究するコースです。

「知識の本質」について考え、私たちが「知っている」と主張することを、いったいどのようにして知るのかを考察します。具体的には、「知識に関する主張」を分析し、知識の構築に関する問いを探究するよう生徒に働きかけていきます。TOKの目的は、共有された「知識の領域」の間のつながりを重視し、それを「個人的な知識」に結びつけることで、生徒が自分なりのものの見方や、他人との違いを自覚できるよう促していくことにあります。

「創造性・活動・奉仕」（CAS : creativity, activity, service）は、DPの中核です。CASを通じて生徒たちは実社会の中の、いわば実地の場において「IBの学習者像」を自ら実践してみる機会を得ることになります。そして、かけがえのない個人として成長し、他者との関係における自らの役割について学ぶことになります。生徒たちはさまざまな単独またはグループでの活動において、自分たちが興味を持っていることを体験したり、夢中になっているテーマや自分の個性、ものの見方についての表現活動を行うことで、スキルや物事に対する向き合い方、考え方を発達させて行きます。CASは、自分で物事を決断すること、他者と共に活動すること、なにかをやり遂げる実感や喜びを感じる機会を生徒たちにもたらし、難易度の高いアカデミックな学習と同時並行して多岐にわたる活動を行うことによって学びを全人的なものとしします。CASは次の3つの要素から成り立っています。

Creativity — アイデアを探究し、それを拡張する取り組みを通じて、独創性や自分の解釈に基づいた作品やパフォーマンスを創造すること

Activity — 健康的なライフスタイルに寄与する身体的な活動を実践すること

Service — コミュニティーの真のニーズに対応するために他者と共に活動を行い、共に働きかつ相互扶助の取り組みに従事すること

「課題論文」(EE: extended essay)では、生徒は、関心のあるトピックの個人研究に取り組み、研究成果を4000語(日本語の場合は8000字)の論文にまとめます。EEには、世界を対象に学際的な研究を行う「ワールドスタディーズ」として執筆されるものも含まれます。生徒は、履修しているDP科目から1科目(「ワールドスタディーズ」の場合は2科目)を選び、対象とする研究分野を定めます。また、EEを通じて大学で必要とされるリサーチスキルや記述力を身につけます。研究は、正式な書式で構成された論文にまとめ、選択した科目にふさわしい論理的で一貫した形式で、アイデアや研究結果を伝えます。高いレベルのリサーチスキル、記述力、創造性を育成し、知的発見を促すことを目的としており、担当教員の指導のもと、生徒が、自分自身で選択したトピックに関する研究に自立的に取り組む機会となっています。

「指導の方法」と「学習の方法」

すべてのDP科目に共通する「指導アプローチの方法」(approaches to teaching)および「学習アプローチの方法」(approaches to learning)とは、指導や学習の場を満たす熟考されたストラテジー、スキル、取り組み姿勢を意味しています。「指導アプローチの方法」も「学習アプローチの方法」も、「IBの学習者像」に示されている人物像と本質的に関連しています。そして、生徒の学習の質を高めると同時に、DPの最終評価やその先の学びのための礎をつくります。DPでの「指導アプローチの方法」と「学習アプローチの方法」には、次のようなねらいがあります。

- ・ 学習内容を教えるだけでなく、学習者を導く存在としての教師のあり方を支援する。
- ・ 生徒の有意義で体系的な探究と、批判的思考や創造的思考を促すため、教師がファシリテーターとしてより効果的なストラテジーを立てられるよう支援する。
- ・ 各教科のねらい(科目別に掲げる目標以上のもの)と、それぞれの知識の関連づけ(同時並行的な学習)の両方を推進する。
- ・ 生徒が卒業後も積極的に学び続けるために、さまざまなスキルを系統的に身につけるよう奨励する。また生徒が良い成績を得て大学に進学できるよう支援すると同時に、大学在学中の学業の成就や卒業後の成功に向けて準備する。
- ・ DPでの生徒の体験の一貫性と関連性をよりいっそう高める。
- ・ 理想主義と実用主義が融合したDPの教育ならではの本質に対して、学校の理解を促進する。

5つの「学習アプローチの方法」(思考スキル、社会性スキル、コミュニケーションスキル、自己管理スキル、リサーチスキルの各スキルの習得)と、6つの「指導アプローチの方法」(探究を基盤とした指導、概念に重点を置く指導、文脈化された指導、協働に基づく指導、生徒の多様性にコラボレーション応じて差別化した指導、評価を取り入れた指導)には、IBの教育を支える重要な価値観と原則が含まれています。

学問的誠実性

DPにおける「学問的誠実性」(academic honesty)は、「IBの学習者像」の人物像を通じて示されている価値観と振る舞いに則しています。学問的誠実性は、指導、学習、そして評価において、各自が誠実で公正であることを促し、他人とその成果物の権利を尊重することを奨励します。また、すべての生徒は学習を通じて身につけた知識や能力を示す機会を等しく得ることが保証されています。

評価のための課題(コースワーク)を含むすべての学習成果物は生徒本人が取り組んだものでなければなりません。学習成果物は生徒自身の独自のアイデアに基づくものであり、他人のアイデアや成果物を用いる場合は出典を明示しなければなりません。教師から生徒への指導を必要とする課題や、生徒同士が協働作業を行って取り組む課題においては、必ず、IBが定めるその教科のためのガイドラインを順守しなければなりません。

IBおよびDPにおける学問的誠実性について、より詳しくはIB資料『学問的誠実性』、『DP：原則から実践へ』、および同『一般規則：ディプロマプログラム』を参照してください。DP科目の学校外で実施されるIBによる外部評価(external assessment)と学校内の教師が評価を手がける内部評価(internal assessment)に関連する学問的誠実性の情報は、本資料の中にも記載されています。

学習の多様性と学習支援の必要な生徒への取り組み

IB資格取得志願者で学習支援を必要とする生徒に対して、学校は同等のアクセスのための配慮と妥当な調整を行わなければなりません。配慮や調整は、IB資料『受験上の配慮の必要な志願者について』および同(英語版)『*Learning diversity in the International Baccalaureate programmes: Special educational needs within the IB programmes* (IB教育と学習の多様性：IBプログラムにおける特別な教育的ニーズ)』に沿って行わなければなりません。

「歴史」の学習

歴史は、「過去との対話」という興味深いテーマを伴う、ダイナミックかつ論争も多い実証的な学問分野です。「変化」、「原因」、「重要性」といった主要概念に重点を置く、厳密で知的な学問分野でもあります。

歴史は、研究心を育てる探究型の科目であり、同時に複数の視点やさまざまな意見に触れる機会をもたらす、解釈に基づく学問でもあります。歴史を学習することで過去に対する理解が生まれ、そしてこれが現在の世界や人間の本質へのより深い理解へとつながります。

ディプロマプログラム（DP）の「歴史」は、多様な視点と比較を重視したアプローチに基づく世界史のコースです。政治、経済、社会、文化の諸相の歴史を学習し、学問としての体系と柔軟さの両方を兼ね備えています。史実を学習するだけでなく、歴史的背景を踏まえて物事を考え、歴史学的な研究のスキルを身につけるよう生徒に奨励することを、このコースでは重視しています。特に、批判的思考のスキルを養い、歴史に複数の解釈があることを理解することが重要です。この結果、高度で能動的な「過去の批判的研究」が行われます。

DPの「歴史」では、以下の6つの主要概念に重点を置いています。

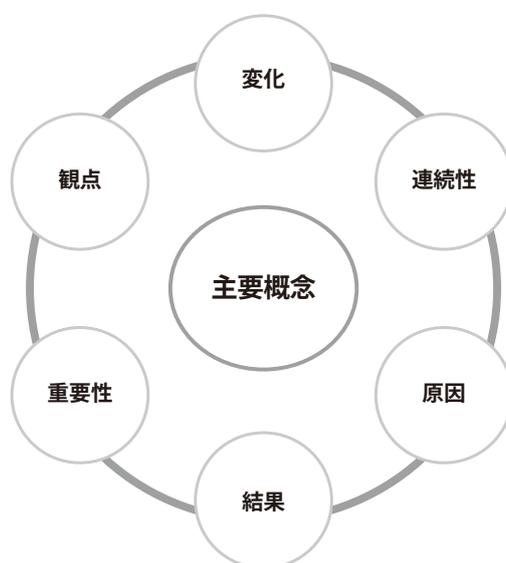


図2

DPの「歴史」の主要概念

これら6つの概念に関する詳しい情報とガイダンスについては、この手引きの「DPの「歴史」で使用する主要概念の詳細」のセクションと、IB資料『「歴史」教師用参考資料』を参照してください。

歴史と国際的な視野

… 国際的な視野を育てる教育、人種・宗教・階級間の壁を取り除くような教育、文化的多様性がもたらす恩恵をたたえる教育、そして何よりも、平和のための教育

(George Walker 2011: 19)

「国際的な視野」とは、IBが国際教育の目標と考えるものをすべて包含する用語であり、この考え方は、グローバル社会への参加、多言語主義、多様な文化の理解の促進をIBのすべてのプログラムが重視しているという事実を表れています。

DPの「歴史」は、国際的な視野の育成を確実にサポートするために策定されています。例えば、コース全体にわたって織り込まれている主要概念のひとつが「ものの見方」であり、とりわけ多数のものの見方の価値を認めるよう生徒に奨励することが重視されています。また、世界のさまざまな地域の状況や事例を研究することがすべての生徒に義務づけられていて、こうした事例の比較を通じて国という枠組みを超えたものの見方がコースにもたらされるようになっていきます。さらに、生徒にとって関連性の高い事例を教師が自由に選択して生徒と一緒に探究できるため、学校の場所や状況にとらわれることなく、生徒のニーズや興味に応えるコースをつくることができます。

DPの「歴史」を学習する生徒は、現在の世界が形成される過程で重要な役割を果たした歴史上の出来事を探究し、過去と現在の出来事がいかに複雑かつ相互に絡み合っているかを理解する機会を得ます。例えば、紛争、権利、統治といった今日の世界が直面している多数のグローバルな問題について、その歴史的な事例を学習します。これにより、過去を考察することを通じて、自分自身そして現代の社会に対する理解を深めるといふ、このコースの中心的なねらいのひとつである学びが促されます。

「標準レベル」と「上級レベル」の違い

標準レベル（SL）と上級レベル（HL）の生徒は、両レベル共通の「指定学習項目」と「世界史トピック」を含んだシラバスに沿って学習を進めます。HLの生徒はこれに加えて、「HL地域選択項目」の3つのセクションについて、詳細研究を行います。歴史を学習するうえで必要とされるスキルの多くはSLとHLの両方に共通しますが、推奨されている授業時間の違いは、生徒に対する要求度がSLとHLで明らかに異なることを示していて、HLでは深いレベルの学習が求められています。

「歴史」におけるSLとHLの違いは以下のとおりです。

	SL	HL
シラバス	<ul style="list-style-type: none"> ・ 5つの「指定学習項目」のうち1項目を選択して学習 ・ 12の「世界史トピック」のうち2項目を選択して学習 ・ 「歴史研究」 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 5つの「指定学習項目」のうち1項目を選択して学習 ・ 12の「世界史トピック」のうち2項目を選択して学習 ・ 1つの「HL地域選択項目」について3セクションを学習 ・ 「歴史研究」
評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「試験問題1」: 「指定学習項目」に関する「資料問題」 ・ 「試験問題2」: 「世界史トピック」に関する小論文 ・ 内部評価: 「歴史研究」 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「試験問題1」: 「指定学習項目」に関する「資料問題」 ・ 「試験問題2」: 「世界史トピック」に関する小論文 ・ 「試験問題3」: 4つの「HL地域選択項目」のいずれか1つに関する小論文* ・ 内部評価: 「歴史研究」

「歴史」とプログラムモデルの「コア」

DPの他のすべてのコースと同様に、「歴史」もDPの「コア」の3要素によって支えられ、かつ3要素を支えるものでなければなりません。

「歴史」と「課題論文」

「歴史」は、DPの生徒が「課題論文」で最もよく使用する科目のひとつです。歴史を取り上げる「課題論文」を書くことで養われるリサーチのスキルは、「歴史」やDPの他の科目の学習に役立つだけでなく、DPを超えたその先の学習の準備としても非常に重要です。歴史を取り上げた「課題論文」としては、以下のようなトピックがここ数年の間に見られました。

- ・ 1965年から1972年にかけてベトナムで展開されたアメリカのフェニックス作戦は、どの程度失敗だったと言えるか。
- ・ ゲティスバーグの戦いにおける北軍の勝利の要因として、地形はどの程度重要だったか。
- ・ キューバ革命中の都市部の抵抗は、革命の成功にどの程度寄与したか。

歴史の「課題論文」で指導教官の役割を果たしている教師向けの詳しい情報は、IB資料『課題論文（EE）指導の手引き』を参照してください。

* 日本語の評価では、地域選択項目として「アジアとオセアニアの歴史」、「ヨーロッパの歴史」のみが提供されます。

「歴史」と「創造性・活動・奉仕」

「創造性・活動・奉仕」(CAS)は、人間的なスキルと対人関係スキルを育成するという点で、DPにおいて非常に重要な役割を果たします。また、DPの他の領域の学問的なプレッシャーとバランスを取るという点でも重要です。

歴史とつながりのあるCASの活動例には、以下のようなものがあります。

- ・ 歴史上の出来事や人物について論じた学校新聞向けの記事に添える挿絵を描く(創造性)
- ・ 高齢者の介護施設でボランティアをして、歴史上の出来事の実体験について話を聞く(奉仕)
- ・ 退役軍人のための募金集めを目的としたマラソン大会を企画し参加する(活動と奉仕)

CASについての詳しい情報は、IB資料『創造性・活動・奉仕(CAS)指導の手引き』を参照してください。

「歴史」と「知の理論」

歴史は、「知の理論」(TOK)で取り上げる8つの知識の領域のひとつです。歴史という知識の領域は、「私たちは、過去についてどの程度確信をもって語れるのか」や「歴史学者の説明は、主観的になることを免れないのか」といった問いを投げかける、興味深い領域です。「歴史」のコースの要素はすべてTOKとの親和性が高いものですが、なかでも内部評価の課題は、TOKと最も明確につながるものです(詳しくは、この手引きの「内部評価」のセクションを参照してください)。生徒は、歴史研究に取り組んだ結果として、歴史学者の使う方法論の役割や、歴史学者が直面する課題について何を学んだかを考察するよう要求されます。これは非常にうまくTOKにつながります。TOKでは、例えば、歴史の知識を得るために使用する方法論と、他の学問領域の知識を得るために使用する方法論を比較するといったことを生徒は行うかもしれないからです。

TOKとのつながりをつくるために使える議論の例としては、以下のようなものが挙げられます。

- ・ 歴史学者の役割とは何か。
- ・ 歴史学者はどのような方法論を用いて知識を得るのか。
- ・ 歴史上の出来事を偏向なく客観的に説明することは可能か。
- ・ 人間は歴史から学ぶことができるのだろうか。
- ・ 「偏った考え方」と「選択的な意見を持っていること」の違いは何か。
- ・ どの出来事が歴史的に重要かを、決めるのは誰か。
- ・ 歴史を学ぶことは、現在の私たち自身を理解するのにどの程度役立つのか。
- ・ 歴史における個人の役割は何か。
- ・ 歴史学者を取り巻く状況や文脈は、歴史的な知識にどのように影響するか。

TOKについての詳しい情報は、IB資料『知の理論（TOK）指導の手引き』を参照してください。

事前の学習経験

DPの「歴史」を履修するにあたって、過去に歴史を学習した経験は必要とされていません。また、このコースの履修準備として、国内資格や国際資格のための特定科目の学習が期待または要求されることもありません。「歴史」の学習で必要とされるスキルや知識は、コースの履修中に身につけていきます。

MYPとの接続

IB中等教育プログラム（MYP）では、「個人と社会」の科目グループの学問領域のひとつとして「歴史」がしばしば提供されています。ただし、この科目グループで提供されているのが「歴史」であれ他の学問領域であれ、MYPの「個人と社会」の科目グループの基本概念は、生徒がDPで「歴史」を学ぶにあたって非常に有用な基礎となります。

MYPの「個人と社会」は、概念を重視するカリキュラムです。そのねらいは、生徒が批判的思考と知識の応用を実践し、意味を見いだせるようになることです。このカリキュラムを支えているのは、「個人と社会」の科目内だけでなく他の科目グループにとっても重要性の高い、幅広く、体系的で、かつ有力な主要概念です。これらの主要概念によって、学問領域内の学習と学際的な学習の両方が促されると同時に、科目間のつながりがつくられます。

MYPには16の主要概念があります。以下の表内で**太字**で示されている4つの概念が、MYPの「個人と社会」の重点となっています。

MYP科目の主要概念			
美しさ	形式	システム	コミュニティー
つながり	創造性	文化	発展
変化	関係性	アイデンティティー	時間、場所、空間
ものの見方	グローバルな相互作用	コミュニケーション	論理

「個人と社会」（グループ3）のねらい

グループ3「個人と社会」の科目はすべて、以下の点を学習のねらいとしています。

1. 「人々の経験と行動」、「物理的・経済的・社会的環境」、「社会制度や文化的慣習の発展とその歴史」について、体系的かつ批判的な学習を奨励する。
2. 個人と社会の性質や活動についての理論、概念、議論を認識して、それらを批判的に分析、評価する力を育む。
3. 社会を研究するためのデータを収集して説明および分析する能力、仮説を検証する能力、複雑なデータや文献を解釈する能力を育む。
4. 学ぶということは自分たちが属する社会の文化と他の社会の文化の双方に関連するものであるという理解を促す。
5. 人々の態度や意見は多様であり、社会の研究にあたってはその多様性を受け入れる必要があるという理解を育む。
6. グループ3の科目の内容や方法論には議論の余地があり、この分野の学問では不確実性を容認する姿勢が求められるという認識を育む。

「歴史」のねらい

上記に加え、「歴史」（SL・HL）では、以下の点もねらいとしています。

7. 過去に対する理解と、過去への飽くなき興味を育む。
8. 多数のものの見方に触れて、歴史的な概念、問題、出来事、発展の複雑さに価値を認めるよう奨励する。
9. 複数の地域の歴史を学ぶことにより、国際的な視野を育てる。
10. 学問領域としての歴史に対する理解を育み、年代や前後関係の感覚をはじめとする歴史的な意識を育て、歴史に対する異なる視点の理解を育む。
11. 文献を的確に扱うスキルなど、歴史学の重要なスキルを習得する。
12. 過去を考察することにより、自分自身と現代の社会に対する理解を深める。

評価目標

評価目標 1：知識と理解

- ・ 詳細、適切、正確な歴史の知識がある。
- ・ 歴史的概念と歴史的文脈を理解している。
- ・ 歴史の文献に対する理解を示す。(内部評価と「試験問題 1」)

評価目標 2：応用と分析

- ・ 明確で論理的な議論を組み立てる。
- ・ 関連性の高い歴史的な知識を使用して、分析を効果的に裏づける。
- ・ さまざまな文献を分析し、解釈する。(内部評価と「試験問題 1」)

評価目標 3：知識の統合と評価

- ・ 証拠と分析を統合して、論理的な議論を構築する。
- ・ 歴史上の問題や出来事についての異なる視点を評価して、議論に有効に統合する。
- ・ 歴史的根拠として文献を評価し、その価値と限界を認識する。(内部評価と「試験問題 1」)
- ・ 関連する文献から得た情報を統合する。(内部評価と「試験問題 1」)

評価目標 4：適切なスキルの使用と応用

- ・ 設問の要求に的確に応える、的の絞れた小論文を構成し、作成する。
- ・ 歴史学者が用いる方法論と歴史学者が直面する課題について考察する。(内部評価)
- ・ 歴史の探究を導く適切かつ的の絞れた質問を組み立てる。(内部評価)
- ・ リサーチスキル、および適切な文献を選択して参照し整理する能力があることを示す。(内部評価)

シラバスの概要

シラバスの構成	授業時間の目安	
	標準レベル (S L)	上級レベル (H L)
指定学習項目 1. 軍事指導者 2. 征服とその影響 3. 世界規模の戦争への動き 4. 権利と抗議運動 5. 紛争と介入	40	40
世界史トピック 1. 社会と経済 (750-1400年) 2. 中世の戦争の原因と結果 (750-1500年) 3. 王朝と支配者 (750-1500年) 4. 過渡期の社会 (1400-1700年) 5. 近世の国家 (1450-1789年) 6. 近世の戦争の原因と結果 (1500-1700年) 7. 産業化のはじまり、発展とその影響 (1750-2005年) 8. 独立運動 (1800-2000年) 9. 民主主義国家の発展 (1848-2000年) 10. 独裁主義的国家 (20世紀) 11. 20世紀の戦争の原因と結果 12. 冷戦：超大国間の緊張と対立 (20世紀)	90	90
H L 選択項目：詳細学習 * 1. アフリカと中東の歴史 2. 南北アメリカの歴史 3. アジアとオセアニアの歴史 4. ヨーロッパの歴史		90
内部評価 歴史研究	20	20
総授業時間数	150	240

H L コース修了のための推奨授業時間240時間、S L コース150時間は、I B 資料（英語版）『一般規則：ディプロマプログラム』で規定されています。

* 日本語の評価では、地域選択項目として「アジアとオセアニアの歴史」、「ヨーロッパの歴史」のみが提供されます。

DPの「歴史」の設計

DPの「歴史」は、授業で扱うトピックの選択に関してかなりの自由度を教師に与えているため、教師は生徒のニーズや興味を最適なかたちで満たすようなコースづくりをすることができます。このセクションは、教師がDPの「歴史」を設計する際に役立つ情報を提供することを目的としています。DPの「歴史」を組み立てるための詳しいガイダンスについては、IB資料『「歴史」教師用参考資料』も参照してください。

ステップ1：「指定学習項目」を1項目選ぶ

5つの「指定学習項目」から1項目を選択します（「シラバスの概要」のセクションを参照）。
「指定学習項目」はそれぞれ、異なる地域の2つの事例研究で構成されています。
選択した「指定学習項目」の事例研究は2つとも学習しなければなりません。

ステップ2：「世界史トピック」を2項目選ぶ

12の「世界史トピック」から2項目を選択します（「シラバスの概要」のセクションを参照）。
教師は、各トピックで取り上げる例を自分の裁量で選択できます。
ただし、どちらのトピックも、複数の地域の例を使って学習しなければなりません。

ステップ3：「HL地域選択項目」を学習する（HLのみ）

日本語の評価では、「HL地域選択項目」としては「アジアとオセアニアの歴史」、「ヨーロッパの歴史」のみが提供されます。（シラバスの概要）セクションを参照）。
「アジアとオセアニアの歴史」、「ヨーロッパの歴史」いずれかの18のセクションの中から3セクションを選択して学習します。

内部評価

SL・HLともに、生徒は内部評価課題である「歴史研究」を完成させます。
研究の対象となる歴史のトピックは、生徒が自由に選択できます。

DPの「歴史」の学習例

以下は、DPの「歴史」の学習例です。ただし、これらはあくまでも幅広い選択肢のなかから取り上げた参考例の一部であるということに留意してください。DPの「歴史」の授業を計画・実施する際、教師は、柔軟に考え、創造性と革新性を働かせることが奨励されています。

例A：中世イスラームの歴史に重点を置いた学習（HL）			
指定学習項目	世界史トピック	HL 選択項目	内部評価
軍事指導者	社会と経済（750-1400年） 王朝と支配者（750-1500年）	アフリカと中東の歴史 ・ アッバース朝（750-1258年） ・ ファーティマ朝（909-1171年） ・ 十字軍（1095-1291年）	研究対象の歴史のトピックは、生徒が自由に選択する（例：ウマイヤ朝支配下における経済の変化）。

例B：近世ヨーロッパの歴史に重点を置いた学習（HL）			
指定学習項目	世界史トピック	HL 選択項目	内部評価
征服とその影響	過渡期の社会（1400-1700年） 近世の戦争の原因と結果（1500-1750年）	ヨーロッパの歴史 ・ 大航海時代とその影響（1400-1550年） ・ 宗教改革（1517-1572年） ・ 絶対主義と啓蒙主義（1650-1800年）	研究対象の歴史のトピックは、生徒が自由に選択する（例：15世紀のヨーロッパにおける印刷機普及の重要性）。

例C：20世紀の世界史に重点を置いた学習（HL）			
指定学習項目	世界史トピック	HL 選択項目	内部評価
世界規模の戦争への動き	独裁主義的国家（20世紀） 冷戦：超大国間の緊張と対立（20世紀）	南北アメリカの歴史 ・ 世界恐慌と南北アメリカ（1920年代半ば-1939年） ・ 第二次世界大戦と南北アメリカ（1933-1945年） ・ 冷戦と南北アメリカ（1945-1981年）	研究対象の歴史のトピックは、生徒が自由に選択する（例：アメリカによる日本への原爆投下の意味）。

例D：アフリカの歴史に重点を置いた学習（HL）			
指定学習項目 権利と抗議運動	世界史トピック 独立運動（1800-2000年） 民主主義国家の発展（1848-2000年）	HL 選択項目 アフリカと中東の歴史 ・植民地政策下のアフリカ ・アフリカの民族運動と独立運動 ・南アフリカの発展（1880-1994年）	内部評価 研究対象の歴史のトピックは、生徒が自由に選択する（例：モザンビークの安定化における国連の貢献）。

例E：探検と植民地化に重点を置いた学習（HL）			
指定学習項目 征服とその影響	世界史トピック 過渡期の社会（1400-1700年） 近世の国家（1450-1789年）	HL 選択項目 アジアとオセアニアの歴史 ・東アジアと東南アジアの探検、貿易、交流（1405-1700年） ・東南アジアの植民地主義とナショナリズムの発展（1750-1914年） ・オセアニアにおけるイギリスの植民地主義とナショナル・アイデンティティーの出現（1788-1919年）	内部評価 研究対象の歴史のトピックは、生徒が自由に選択する（例：トルデシヤス条約の政治的・経済的影響）。

例F：「アイデンティティー」という概念に重点を置いた学習（SL）		
指定学習項目 紛争と介入	世界史トピック 独立運動（1800-2000年） 20世紀の戦争の原因と結果	内部評価 研究対象の歴史のトピックは、生徒が自由に選択する（例：1995年のスレブニツァの虐殺がもたらした社会的影響）。

例G：20世紀の世界史に重点を置いた学習（SL）

指定学習項目	世界史トピック	内部評価
権利と抗議運動	独裁主義的国家（20世紀） 20世紀の戦争の原因と結果	研究対象の歴史のトピックは、生徒が自由に選択する（例：イギリスの婦人参政権運動でエメリン・パンクハーストが果たした役割とその重要性）。

シラバスの内容

指定学習項目

以下の「指定学習項目」から**1項目**を選択して学習します。

1. 軍事指導者
2. 征服とその影響
3. 世界規模の戦争への動き
4. 権利と抗議運動
5. 紛争と介入

以下のセクションでは、「指定学習項目」のそれぞれで学習する内容を詳しく説明します。「指定学習項目」では、異なる地域を取り上げる事例研究が各2つ用意されています。選択した「指定学習項目」の事例研究は必ず**2つとも**学習しなければなりません。事例研究はかなり狭い範囲に絞り込んだ学習のため、教師はその背後にある幅広い文脈を生徒が理解できるよう導いていくことが重要です。

「指定学習項目」は、資料問題である「試験問題1」で評価されます（詳しくは「外部評価」のセクションを参照してください）。このため、一次資料の歴史的根拠や二次資料を幅広く使用しながら、選択した「指定学習項目」の内容を学び、評価要素で求められるスキルを向上させることが重要です。

指定学習項目 1：軍事指導者

この「指定学習項目」は、中世における2人の有名な軍事指導者、モンゴルのチンギス＝ハンとイギリスのリチャード1世を取り上げ、彼らがもたらした影響を考察します。異なる地域に関する2つの事例研究は、両方とも学習しなければなりません。1つ目の事例研究は、チンギス＝ハンと13世紀初期のモンゴル帝国の拡大に焦点をあてます。2つ目の事例研究は、イングランド王リチャード1世に焦点をあて、父であるヘンリ2世に対して謀反を起こした1173年から1199年の死去までを扱います。

事例研究	詳細学習のための題材
事例研究 1：チンギス＝ハン（1200-1227年）	<p>指導力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 権力の掌握、対立する部族の統合 ・ 動機と目的、目的の達成 ・ 評判：すぐれた軍才、チンギス＝ハン（成吉思汗）への改名（1206年） ・ モンゴルの成功におけるチンギス＝ハンの指導力の重要性 <p>軍事行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ モンゴルの中国侵攻：金朝に対する攻撃、北京制圧（1215年） ・ モンゴルの中央アジアおよびイラン侵攻、モンゴルのホラズム侵攻（1219-1221年） ・ モンゴルの軍事技術、組織、戦略、戦術 <p>影響</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 政治的影響：行政、既存の支配体制の転覆、モンゴル帝国の法「ヤサ」の確立、能力主義社会への移行 ・ 経済的影響：貿易ルートの確立、強化、保護 ・ 社会・文化・宗教への影響：人口移動、テロ、略奪、殺人、集落の襲撃と破壊、宗教間交流、文化交流、技術交流、モンゴル帝国支配下の宗教の自由

事例研究	詳細学習のための題材
事例研究 2：イングランド王リチャード1世（1173-1199年）	<p>指導力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 政権の掌握：リチャード1世と兄弟によるヘンリ2世への反逆（1173-1174年） ・ 評判：すぐれた軍才、騎士道、「リチャード獅子心王」 ・ 動機と目的：フランス国内の領土の回復と防衛、十字軍国家の防衛と失地回復、これらの目的の達成 <p>軍事行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ シチリア占領（1190-1191年）、キプロス侵攻（1191年） ・ 第3回十字軍への関与（1191-1192年） ・ リチャード1世によるフランス、地中海地方、中東への軍事行動の過程、結果、影響 <p>影響</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ イングランドでの政治的影響：王の不在、政情不安、リチャード1世不在中のジョンとフィリップ2世の反逆 ・ フランスでの政治的影響：カペー朝の台頭と権力の強化、王権の拡大 ・ 経済的影響：軍事資金の工面、聖職者課税、オーストリア公レオポルド5世と神聖ローマ皇帝ハインリヒ6世による捕囚の際の身代金の工面（1193年） ・ 社会・文化・宗教への影響：反ユダヤ主義的暴力、第3回十字軍のイスラーム教徒捕虜の扱い

指定学習項目 2：征服とその影響

この「指定学習項目」は、スペインによる征服を取り上げます。異なる地域に関する2つの事例研究は、両方とも学習しなければなりません。1つ目の事例研究は、イベリア半島のイスラーム統治の最終期を扱うもので、半島における最後のイスラーム国家であったグラナダの陥落（1492年）に焦点をあてます。2つ目の事例研究は、メキシコとペルーの征服を通じて試みられた、ラテンアメリカでのスペイン帝国の構築に焦点をあてます。

事例研究	詳細学習のための題材
事例研究 1：スペインのイスラーム統治の最終期	<p>背景と動機</p> <ul style="list-style-type: none"> 15世紀後半のイベリアとアンダルスにおける政治的背景、15世紀後半のグラナダにおける内部抗争と内部協調 15世紀後半のイベリアとアンダルスにおける社会的・経済的背景、人々の共存、多様な文化の交流、経済の衰退、重い課税 動機：政治的動機、宗教上の動機と教会の役割 <p>主な出来事と人物</p> <ul style="list-style-type: none"> グラナダ戦争とグラナダの征服（1482-1492年） グラナダ条約（1491年）、アルハンブラ訓令（1492年） 主要人物：スペイン国王フェルナンドと女王イサベル、グラナダ最後の王ボアブディル（ムハンマド12世） <p>影響</p> <ul style="list-style-type: none"> 社会と人口構造の変化、迫害、奴隷化、国外への移住、新たな制度、エンコミエンダ制、フエロ 強制的な改宗と追放、マラーノ、ムデハル スペイン異端審問
事例研究 2：メキシコとペルーの征服（1519-1551年）	<p>背景と動機</p> <ul style="list-style-type: none"> 探検と征服の政治的・経済的動機 征服を支持する宗教上の議論 <p>主な出来事と人物</p> <ul style="list-style-type: none"> エルナン・コンテスのアステカ帝国征服、先住民との同盟関係 フランシスコ・ピサロのインカ帝国征服、先住民との同盟関係 主要人物：ディエゴ・デ・アルマグロ、マリンチェ、アタワルパ、モクテスマ2世、ラス・カサス対セプルベダ <p>影響</p> <ul style="list-style-type: none"> 先住民族に対する社会的・経済的影響、エンコミエンダ制とミタ制 人口構造の変化の原因と影響、疫病のまん延 文化間の相互関係、文化交流

指定学習項目 3：世界規模の戦争への動き

この「指定学習項目」は、1931年から1941年までの軍備拡張を取り上げます。異なる地域に関する2つの事例研究は、両方とも学習しなければなりません。1つ目の事例研究は1931年から1941年にかけての日本の拡張政策、2つ目の事例研究は1933年から1940年にかけてのドイツとイタリアの拡張政策で、特に拡張の理由、主な出来事、拡張に対する国際的な反応に重点を置きます。このため、国内の問題やイデオロギーに関する問題などは、これらが拡張政策にどの程度影響したのかという観点から議論する必要があります。例えば、世界恐慌の長期的影響といった経済問題は、攻撃的な外交政策の形成との関連という角度から考察します。

事例研究	詳細学習のための題材
事例研究 1：東アジアにおける日本の拡張政策 (1931-1941年)	<p>拡張の理由</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 日本のナショナリズムと軍国主義が外交政策に与えた影響 ・ 日本国内の政治・経済問題、それらの問題が外交関係に与えた影響 ・ 中国の政情不安 <p>出来事</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 日本による満州と中国北部への侵攻 (1931年) ・ 日中戦争 (1937-1941年) ・ 日独伊三国同盟、大戦の勃発、パールハーバー (真珠湾) 奇襲 (1941年) <p>反応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 国際連盟とリットン報告書 ・ 中国国内の政治展開、第二次国共合作 ・ アメリカ合衆国の戦略と日米間の緊張状態を含む国際的な反応
事例研究 2：ドイツとイタリアの拡張政策 (1933-1940年)	<p>拡張の理由</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ファシズムとナチズムがイタリアとドイツの外交政策に与えた影響 ・ 国内の経済問題がイタリアとドイツの外交政策に与えた影響 ・ ヨーロッパの外交関係の変化：集団安全保障の終焉、宥和政策 <p>出来事</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 第一次世界大戦後の合意に対するドイツの挑戦 (1933-1938年) ・ イタリアの拡張政策：アビシニア (1935-1936年)、アルバニア、第二次世界大戦への参戦 ・ ドイツの拡張政策 (1938-1939年)、鋼鉄協約、独ソ不可侵条約、大戦の勃発 <p>反応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ドイツの侵攻に対する国際的な反応 (1933-1938年) ・ イタリアの侵攻に対する国際的な反応 (1935-1936年) ・ ドイツとイタリアの侵攻に対する国際的な反応 (1940年)

指定学習項目 4：権利と抗議運動

この「指定学習項目」は、20世紀半ばの権利と自由を求めた闘争を取り上げます。異なる地域に関する2つの事例研究は、両方とも学習しなければなりません。1つ目の事例研究は、アメリカ合衆国の1954年から投票権法が成立した1965年までの公民権運動を扱います。2つ目の事例研究は、南アフリカの反アパルトヘイト（人種隔離政策）運動を扱います。ここでは特に、国民党が政権を握った1948年から、リボニア裁判の判決によってネルソン・マンデラとその共同被告人たちが投獄された1964年までに焦点をあてます。

事例研究	詳細学習のための題材
事例研究 1：アメリカ合衆国の公民権運動（1954-1965年）	<p>差別の性質と特徴</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ アフリカ系アメリカ人に対する人種差別と暴力、クー・クラックス・クラン、公民権の剥奪 ・ 人種分離政策と教育、ブラウン対教育委員会裁判（1954年）、リトルロック高校事件（1957年） ・ 経済的・社会的差別、ジム・クロウ法の「遺産」、個人への影響 <p>抗議運動とその影響</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 非暴力抗議、モンゴメリー・バス・ボイコット事件（1955-1956年）、フリーダム・ライド（1961年）、フリーダム・サマー（1964年） ・ 法的变化：公民権法（1964年）、投票権法（1965年） <p>主な人物と団体が果たした役割とその重要性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 主な人物：マーティン・ルーサー・キング・ジュニア、マルコムX、リンドン・ベインズ・ジョンソン ・ 主な団体：全国有色人種向上協会（NAACP）、南部キリスト教指導者会議（SCLC）、学生非暴力調整委員会（SNCC）、ネーション・オブ・イスラム（ブラックムスリム）
事例研究 2：南アフリカのアパルトヘイト（1948-1964年）	<p>差別の性質と特徴</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「小アパルトヘイト」と「大アパルトヘイト」 ・ 分裂と「分類」、住民と公共施設の分離、黒人居住区の建設と強制立ち退き、教育の分離、バントゥースタン政策、個人への影響 <p>抗議運動とその影響</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 非暴力抗議、バス・ボイコット運動、反対運動、自由憲章 ・ 増加する暴力行為：シャープビル虐殺事件（1960年）と武装闘争の選択 ・ 公的な反応：リボニア裁判（1963-1964年）とANC指導者の投獄 <p>主な人物と団体が果たした役割とその重要性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 主な人物：ネルソン・マンデラ、アルバート・ルツェリ ・ 主な団体：アフリカ民族会議（ANC）、南アフリカ共産党（SACP）とMK（ウムコント・ウェ・シズウェー「民族の槍」）

指定学習項目 5：紛争と介入

この「指定学習項目」は、20世紀後期の紛争と介入を取り上げます。異なる地域に関する2つの事例研究は、両方とも学習しなければなりません。1つ目の事例研究は、1994年のルワンダ虐殺に焦点をあて、ルワンダ内戦の勃発した1990年から国際刑事裁判所が設立された1998年までを扱います。2つ目の事例研究は、1998年から1999年にかけて起こったコソヴォ紛争をめぐる出来事に焦点をあて、民族間の緊張が高まり始めた1989年から2002年の選挙までを扱います。

事例研究	詳細学習のための題材
事例研究 1：ルワンダ（1990-1998年）	<p>紛争の原因</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ルワンダにおける民族間の緊張、フツ・パワーの形成とインテラハムウェ、メディアの役割 ・ その他の原因：経済状況、植民地時代の遺産 ・ ルワンダ紛争（1990-1993年）、ハビャリマナとタリャミラの暗殺（1994年） <p>過程と介入</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ルワンダ愛国戦線（RPF）の活動とルワンダ政府、メディアの役割 ・ 虐殺とその他の非人道的犯罪の性質、紛争下の性的暴力 ・ 国際社会の反応、国連ルワンダ支援団（UNAMIR）、非介入の理由、フランス、ベルギー、アメリカ合衆国の役割 <p>影響</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 社会的影響、難民危機、正義と和解 ・ 国際的な影響、ルワンダ国際戦犯法廷の設立（1994年） ・ 政治的・経済的影響、RPF主導の政府、コンゴ民主共和国（ザイール）での相次ぐ武力衝突

事例研究	詳細学習のための題材
事例研究 2 : コソヴォ (1989-2002年)	<p>紛争の原因</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ セルビア人とコソヴォのアルバニア人との間の緊張、アルバニア人の民族主義運動の高まり ・ 政治的要因：憲法改正 (1989-1994年)、アルバニア独立運動の抑圧 ・ スロボダン・ミロシェヴィッチとイブラヒム・ルゴヴァが果たした役割とその重要性 <p>過程と介入</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ コソヴォ解放軍の動き、セルビア政府の警察と軍隊 ・ 民族浄化と非人道的犯罪、ラチャク虐殺が意味するもの ・ 国際社会の反応、国連の反応、NATOによる空爆、コソヴォ治安維持部隊 (KFOR) <p>影響</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 社会的・経済的影響、難民危機、インフラへのダメージ ・ コソヴォでの政治的影響、イブラヒム・ルゴヴァの大統領当選 (2002年) ・ 国際的な反応と影響、旧ユーゴスラビア国際戦犯法廷 (ICTY)、ミロシェヴィッチの起訴

世界史トピック

「歴史」のシラバスのこの部分では、世界史における主要なトピックを学習します。教師は、以下の12のトピックから**2つ**を選んでください。

1. 社会と経済（750－1400年）
2. 中世の戦争の原因と結果（750－1500年）
3. 王朝と支配者（750－1500年）
4. 過渡期の社会（1400－1700年）
5. 近世の国家（1450－1789年）
6. 近世の戦争の原因と結果（1500－1700年）
7. 産業化のはじまり、発展とその影響（1750－2005年）
8. 独立運動（1800－2000年）
9. 民主主義国家の発展（1848－2000年）
10. 独裁主義的国家（20世紀）
11. 20世紀の戦争の原因と結果
12. 冷戦：超大国間の緊張と対立（20世紀）

以下のセクションでは、「世界史トピック」それぞれの学習テーマと、指定の学習内容の概要を説明し、さらに各トピックで扱う例も提案しています。ただし、これらはあくまでも**提案**であり、規定ではないことに留意してください。これらの参考例を授業で使うことができますが、そうではなく、生徒のニーズや興味により近い例を使うこともできます。各トピックで学習する例は、必ず複数の地域から取り上げます。なお、DP「歴史」では、世界を「アジアとオセアニア」、「アフリカと中東」、「ヨーロッパ」、「南北アメリカ」の4地域に区分しています。

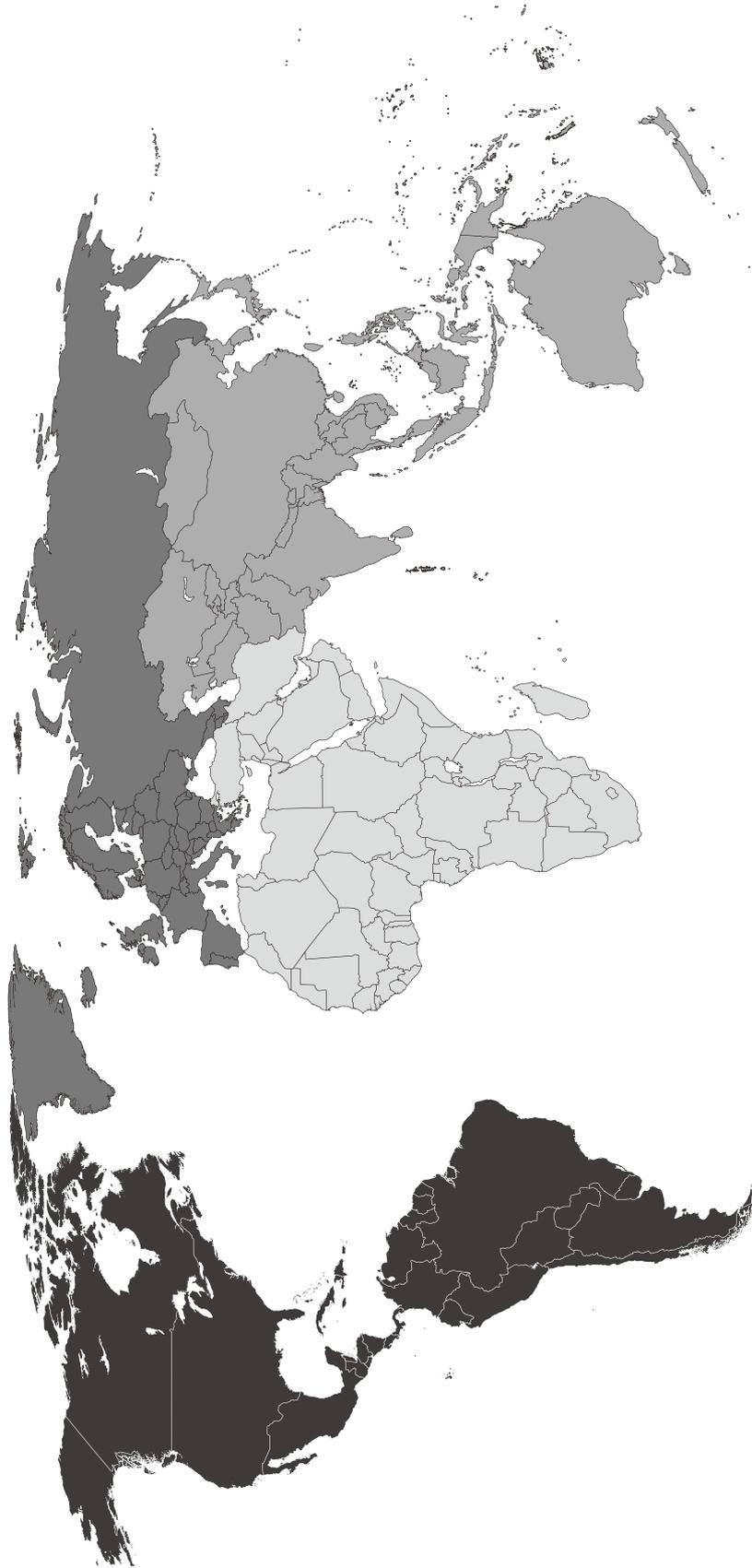


図3

DPの「歴史」の「4地域」を示した世界地図

世界史トピック 1：社会と経済（750–1400年）

このトピックでは、中世の社会経済の変化と連続性に焦点をあてます。黒死病の流行などの劇的な出来事をもたらした社会的・経済的影響、マルコ＝ポーロやイブン＝バトゥータなどの重要な人物が残した功績について考察します。また、これらの社会的・経済的変化の原因と結果の両方を探究し、この時代の主要な知的・文化的発展について探究することに重点を置きます。なお、試験のいくつかの設定では、複数の地域の例を比較することが要求されます。

学習テーマ	指定の学習内容
社会と経済	<ul style="list-style-type: none"> ・ 社会構造と社会制度の変化 ・ 人口変化の影響、飢饉や疫病の影響 ・ 社会における女性の役割：経済的役割とそれ以外の役割 ・ 貿易の性質とその発展、経済システムの変化、課税 ・ 輸送交通の変化
知的・文化的発展	<ul style="list-style-type: none"> ・ 主な人物が果たした役割とその重要性 ・ 思想や文化の伝播に影響した要因 ・ 芸術と文化の発展の重要性とその影響、建築の発展 ・ 科学と技術の発展
宗教と社会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 宗教組織：宗教組織と経済、宗教組織が社会に与えた影響 ・ 宗教的指導者：政府や行政における宗教的指導者の役割、統治者と宗教的指導者の対立 ・ 宗教的少数派の扱い、宗教迫害 ・ 宗教の普及

このトピックの学習で使用できる例

以下の例はあくまでも提案です。これらの例を使って授業を行うこともできますが、教師と生徒のニーズや興味に応じて別の適切な例を使うこともできます。

アフリカと中東：アフリカにおけるイスラーム教の普及、ガザーリー（1058–1111年）やモーシェ・ベン＝マイモーン（1135/1138–1204年）などの人物、エジプトの小作農民に課された重税、ガーナ王国によるサハラ交易への課税、マムルーク朝支配下のエジプトで黒死病やその他の疫病が及ぼした影響

南北アメリカ：8～9世紀のマヤ文明の衰退、タラスコ地域の建築、アサバスカ諸語を話す人々のプエブロ族領土への移動、ウッドランド文化とミシシッピ文化

アジアとオセアニア：仏教の普及、宋の時代（960–1279年）の文化的発展、アンコール・ワットの建築、シルクロード貿易、日本における武士の台頭

ヨーロッパ：ダンテ・アリギエーリ（1265–1321年）などの人物、黒死病の影響、ヨーロッパの荘園制度、ヴェネツィアやジェノヴァなどの都市国家がヨーロッパ経済で果たした役割、西ヨーロッパのロマネスク建築からゴシック建築への移行

世界史トピック 2：中世の戦争の原因と結果（750–1500年）

中世の世界の形成においては、共同体内や共同体間の戦争と紛争、そして軍備拡張が重要な役割を果たしました。このトピックでは、中世の戦争と紛争の原因と結果、さらにこの時代の戦争行為を探究します。試験答案では、特定の戦争や紛争に言及することが要求され、またいくつかの設問では、2つの地域の戦争や紛争に言及することが要求されます。このため、異なる地域の王朝の争い、領土紛争、宗教紛争の例を学習する必要があります。このトピックで学習する例には、十字軍遠征のようにDPの「歴史」の地域区分をまたいで起きた戦争や紛争が含まれています。試験の設問が異なる地域の戦争の例について議論することを要求している場合は、地域をまたぐ戦争を特定の地域に関連させて論じることができません（例：十字軍遠征が中東地域にもたらした影響）、同じ答案で同じ戦争を別の地域に関連させて論じることができません（例：十字軍遠征がヨーロッパ地域にもたらした影響）。

学習テーマ	指定の学習内容
戦争・紛争の種類と原因	<ul style="list-style-type: none"> ・ 王朝、領土、宗教をめぐる争い ・ 経済的要因、資源をめぐる競争 ・ イデオロギー的要因、政治的要因 ・ 宗教的要因 ・ 長期的要因、短期的要因、直接的・即時的要因
過程	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指導者の役割とその重要性 ・ 軍隊の召集：騎士団、兵役、傭兵、課税 ・ 戦争の兵站術、戦術、編成 ・ 戦争と女性
結果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 征服、国境や王朝の変化 ・ 条約、停戦協定 ・ 政治的影響 ・ 経済、社会、宗教、文化の変化 ・ 人口の変化と人口移動

このトピックの学習で使用できる例

以下の例はあくまでも提案です。これらの例を使って授業を行うこともできますが、教師と生徒のニーズや興味に応じて別の適切な例を使うこともできます。

戦争の例：イングランドのノルマン征服（1066年）、イングランドとフランスの争い（1154–1204年）、百年戦争（1337–1453年）、薔薇戦争（1455–1487年）、十字軍（1095–1291年）、モンゴル帝国帝位継承戦争（1260–1264年）、アッバース朝のカリフ継承をめぐるアミーーンとマアムーンの争い（809–813年）、セルジューク・東ローマ戦争（1046–1308年）、クルム時代のブルガリア・東ローマ戦争、テパネカ族とアステカ族の争い（1428–1430年）

指導者の例：ヌールッディーン（1118-1174年）、サラーフ・アッディーン（1137/1138-1193年）、イングランド王リチャード1世（1157-1199年）、イングランド王エドワード3世（1312-1377年）、フランス王ルイ7世（1120-1180年）、フランス王シャルル5世（1338-1380年）、チンギス=ハン（1162-1227年）、フビライ・ハン（1215-1294年）、ティムール（1336-1405年）

世界史トピック3：王朝と支配者（750–1500年）

このトピックでは、王朝と王国、およびその支配者に焦点をあてます。これら支配者の地位、権力、立場、さらには、どのようにして統治に至り、またその支配を保持したのかを探究します。「王朝国家はどのようにして出現したのか」という問いが、このトピックの中心を担います。支配者はそれぞれどのような権力を保持または主張したのでしょうか。どのように国家を統治し、支配を正当化したのでしょうか。それに伴ってどのような機構が出現したのでしょうか。試験答案では、特定の王朝に言及することが要求され、またいくつかの設問では、異なる地域の王朝に言及することが要求されます。

学習テーマ	指定の学習内容
王朝と支配者	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個々の支配者たち：権力と支配の性質、目的と功績 ・ 支配を正当化、強化、維持するために用いられた方法 ・ 王朝・王国の拡張：拡張の理由、権力拡大のために用いられた方法、侵略と入植
法、統治機関、行政	<ul style="list-style-type: none"> ・ 統治・行政のモデルと方法 ・ 宗教法と世俗法の起源 ・ 法の執行と解釈 ・ 役人の任務と役割、貴族やエリートの役割
変化	<ul style="list-style-type: none"> ・ 王朝および支配者の成功と失敗 ・ 権力に対する内部と外部からの挑戦、挑戦に打ち勝った例 ・ 抵抗と政治的敵対勢力、対立関係と継承問題

このトピックの学習で使用できる例

以下の例はあくまでも提案です。これらの例を使って授業を行うこともできますが、教師と生徒のニーズや興味に応じて別の適切な例を使うこともできます。

王朝の例：アッバース朝（750–1258年）、ファーティマ朝（909–1171年）、ザグウェ朝（900–1270年）、カロリング帝国（800–888年）、宋朝（900–1279年）、金朝（1115–1234年）、モンゴル帝国（1206–1368年）、ムワッヒド朝（1120–1269年）、第二次ブルガリア帝国（1185–1396年）、キエフ大公国（882–1283年）、クスコ王国（1197–1438年）、ベトナム陳朝（1225–1400年）、トゥールーン朝（868–905年）、アイユーブ朝（1171–1341年）、コムネノス王朝（1081–1204年）

支配者の例：カール大帝（768–814年）、ティムール（1370–1405年）、マティルダ（1141年）、フランス王ルイ6世（1108–1137年）、ハールーン・アッラシード（786–809年）、後ウマイヤ朝のアブド・アッラフマーン3世（912–961年）、「バルバロッサ（赤髭王）」フリードリヒ1世（神聖ローマ皇帝、1155–1190年）、東ローマ女帝テオドラ（1042–1056年）、イツコアトル（1427–1440年）、洪武帝（1368–1398年）、バシレイオス2世（976–1025年）、バイバルス（1260–1277年）

世界史トピック 4：過渡期の社会（1400–1700年）

このトピックでは、社会変化の探究に重点を置き、経済・社会・文化に劇的な変化が起こった中世から近代への変遷期に焦点をあてます。試験答案では、特定の例に言及することが要求され、またいくつかの設問では、2つの地域の例に言及することが要求されます。

学習テーマ	指定の学習内容
社会と経済の変化	<ul style="list-style-type: none"> ・ 変わりゆく社会構造と社会制度、社会における女性の役割 ・ 人口増加と人口移動 ・ 社会的少数者の待遇 ・ 経済の変化：貿易の発展と変化、商人と旅行者の役割と影響
文化的・知的変化	<ul style="list-style-type: none"> ・ 芸術活動、文化活動、知的活動 ・ 異文化間交流 ・ 科学と技術の発展、これらの発展がもたらした社会的・文化的影響 ・ 主な知識人や科学者が果たした役割とその重要性
宗教の変化	<ul style="list-style-type: none"> ・ 宗教と国家：相互作用と関係性、国家の支えとしての宗教、国家への挑戦としての宗教 ・ 宗教の拡大と改宗 ・ 宗教分裂、宗教紛争、宗教的差別、宗教的迫害

このトピックの学習で使用できる例

以下の例はあくまでも提案です。これらの例を使って授業を行うこともできますが、教師と生徒のニーズや興味に応じて別の適切な例を使うこともできます。

アフリカと中東：塩金貿易がアフリカの帝国の隆盛と衰退に及ぼした影響、エチオピアのキリスト教芸術と建築、バントゥー系民族の移動、奴隷制がアフリカの経済と社会に及ぼした影響、西アフリカとスワヒリ・コーストにおけるイスラーム教の普及

アジアとオセアニア：インド洋貿易、明朝の崩壊、日本の安土桃山時代（1568–1600年）

南北アメリカ：南北アメリカの先住民族の扱い、大西洋をまたぐ貿易、奴隷制が南北アメリカの経済と社会に及ぼした影響

ヨーロッパ：ルネサンス、啓蒙主義時代、グーテンベルクの印刷機（1450年）、封建制の衰退、スペイン異端審問、宗教改革と対抗宗教改革、新たな航法計器などの発明が及ぼした影響、コペルニクス、ケプラー、ニュートン、ガリレオなどの科学界の先駆者が及ぼした影響

世界史トピック5：近世の国家（1450–1789年）

このトピックでは、近世の政治の変化に焦点をあてます。植民地帝国の建設と拡大、それが植民地に及ぼした社会的・経済的・文化的影響を考察します。試験答案では、特定の例に言及することが要求され、またいくつかの設問では、2つの地域の例に言及することが要求されます。

学習テーマ	指定の学習内容
権力と支配の性質	<ul style="list-style-type: none"> ・ 既存の国家と新たな国家、権力を強めた国家と衰退の道をたどった国家 ・ 統治の方法とモデル、政治構造や政治組織の変化の理由、国内政策、臣民の扱い ・ 個々の支配者たち：イデオロギー、支配の性質、野望と達成、正当性、成功と失敗
権力の拡大	<ul style="list-style-type: none"> ・ 既存国家の拡大、拡大の政治的・経済的理由 ・ 既存国家の政治組織：統治の構造と政治構造、統治のモデルと方法、宗教と国家の関係 ・ 植民地帝国の建設と拡大、領土の拡大と獲得の政治的・経済的理由 ・ 植民地の政治組織：植民地支配における統治の構造と政治構造、統治のモデルと方法、宗教と国家の関係
権力への挑戦と紛争	<ul style="list-style-type: none"> ・ 権力維持のための方法、反対勢力への対処 ・ 支持と抵抗、権力への挑戦、挑戦はどの程度退けられたのか ・ 植民地支配に対する挑戦：抵抗、反乱とその影響、植民地競争—競争と紛争 ・ 対立関係と緊張、継承問題

このトピックの学習で使用できる例

以下の例はあくまでも提案です。これらの例を使って授業を行うこともできますが、教師と生徒のニーズや興味に応じて別の適切な例を使うこともできます。

アフリカと中東：オスマン帝国の中東と北アフリカへの拡大、サファヴィー朝ペルシア、ソンガイ帝国（1464-1591年）、ベニン王国、アジュラン・スルタン国

南北アメリカ：ヌエバ・エスパーニャ副王領、北アメリカのイギリス植民地、植民地をめぐる英仏の争い、イロコイ連邦、スペインによるインカ帝国侵攻、スペイン帝国への挑戦と1680年のプエブロの反乱

アジアとオセアニア：江戸幕府、初期の清朝、ムガル帝国、タイのアユタヤ王朝の拡大と縮小

ヨーロッパ：オスマン帝国のヨーロッパへの拡大、ピョートル大帝統治下のロシア帝国の拡大と再編成、1492年以降のグラナダ、ルイ14世統治下のフランス

世界史トピック6：近世の戦争の原因と結果（1500–1750年）

近世の時代、戦争の規模と領域が劇的に拡大し、火薬の普及などを受けて戦争行為の性質にも大きな変化が起きました。このトピックでは、近世の戦争や紛争の原因と結果、およびこの時代の戦争行為について探究します。試験答案では、特定の戦争や紛争に言及することが要求され、またいくつかの設問では、2つの地域の戦争や紛争の例に言及することが要求されます。試験の設問が異なる地域の戦争の例について議論することを要求している場合は、地域をまたぐ戦争を特定の地域に関連させて論じることができますが、同じ答案で同じ戦争を別の地域に関連させて論じることができません。

学習テーマ	指定の学習内容
戦争・紛争の原因	<ul style="list-style-type: none"> ・ イデオロギー的要因、政治的要因 ・ 経済的要因、資源をめぐる競争 ・ 宗教的要因 ・ 短期的要因、長期的要因
戦争・紛争の過程と結果への影響	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指導者の役割とその重要性 ・ 軍隊の召集：兵役と傭兵、課税 ・ 軍隊の編成、戦術：地上戦と海戦 ・ 技術進歩の重要性 ・ 外国勢力の関与と影響
結果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 和平調停の成功と失敗 ・ 経済、政治、領土への影響 ・ 社会と宗教への影響 ・ 人口の変化と人口移動

このトピックの学習で使用できる例

以下の例はあくまでも提案です。これらの例を使って授業を行うこともできますが、教師と生徒のニーズや興味に応じて別の適切な例を使うこともできます。

アフリカと中東：エチオピアとアダル・スルタン国の戦争（1529-1543年）、オスマン・マムルーク戦争（1516-1517年）、モロッコによるソンガイ帝国侵攻（1591年）

南北アメリカ：アカディアの内戦（1640-1645年）、「ビーバー戦争」（17世紀半ば）、スペインによるアステカ帝国とインカ帝国の征服、プエブロの反乱（1680年）

アジアとオセアニア：ムガル帝国による征服、泰緬戦争（1547-1549年）、日本の朝鮮出兵（文禄・慶長の役、1592-1598年）、清による明の征服

ヨーロッパ：オランダ独立戦争（八十年戦争、1568-1648年）、三十年戦争（1618-1648年）、ロシア・スウェーデン戦争（1554-1557年）、大北方戦争（1700-1721年）、イングランド内戦（1642-1651年）

世界史トピック7：産業化のはじまり、発展とその影響（1750–2005年）

このトピックでは、産業化が社会経済に及ぼした大きな変化に焦点をあてます。産業化の時期は国ごとに異なるため、指定の全期間（1750–2005年）のうちどの時代を扱うかは、どの例を学習するかによって変わってきます。このトピックの重点は、産業化のはじまりと発展、その影響を探究することです。試験のいくつかの設問では、異なる地域から選択した2つの国の産業化の例に言及することが要求されます。

学習テーマ	指定の学習内容
産業化のはじまり	<ul style="list-style-type: none"> ・ 産業化の理由および鍵となった要因、人的資源と天然資源、政治的安定、インフラ ・ 技術進歩が果たした役割とその重要性 ・ 個人が果たした役割とその重要性
主な発展がもたらした影響とその重要性	<ul style="list-style-type: none"> ・ 輸送手段の発展 ・ エネルギーと電力に関係した発展 ・ 産業基盤、鉄鋼 ・ 大量生産 ・ 通信手段の発展
産業化がもたらした社会的・政治的影響	<ul style="list-style-type: none"> ・ 都市化および都市と工場の成長 ・ 労働条件、労働組織 ・ 政治的代表、産業化への抵抗 ・ 生活水準への影響、疫病と平均寿命、娯楽、リテラシーとメディア

このトピックの学習で使用できる例

以下の例はあくまでも提案です。これらの例を使って授業を行うこともできますが、教師と生徒のニーズや興味に応じて別の適切な例を使うこともできます。

国の例：

- ・ アフリカと中東：エジプト、南アフリカ
- ・ 南北アメリカ：アルゼンチン、アメリカ合衆国、カナダ
- ・ アジアとオセアニア：日本、インド、オーストラリア
- ・ ヨーロッパ：イギリス、ドイツ、ロシアまたはソ連

技術進歩の例： 燃焼機関、蒸気発電・蒸気機関、ガス照明、発電、鉄生産、綿糸紡績の機械化、硫酸の生産、鋼鉄の生産とベッセマー法、原子力、情報技術の発展

重要な人物の例： トーマス・エジソン、ライト兄弟、チャールズ・バベッジ、アンドリュー・カーネギー、コーネリアス・ヴァンダービルト、アレクサンダー・グラハム・ベル、ヘンリー・フォード、リチャード・アークライト、マイケル・ファラデー、ジェームズ・ワット、ジャン＝ジョゼフ・エティエンヌ・ルノアール、ティム・バーナーズ＝リー

世界史トピック 8：独立運動（1800–2000年）

このトピックでは、19世紀と20世紀に出現した新たな国家に焦点をあてます。独立運動のはじまりと発展、成功の理由、新たな国家が最初の10年間に直面した課題、またこれらの課題に対する取り組みについて探究していきます。試験のいくつかの設定問では、異なる地域から選択した2つの独立運動について言及することが要求されます。生徒が指定の学習内容のすべての側面を有意義に比較できるようになるため、少なくとも3つの独立運動を学習することが推奨されます。なお、このトピックの焦点は、外国勢力からの独立を求めた独立運動であることに留意してください。このためポーランドの「連帯」運動などは、このトピックの例としては適切ではありません。

学習テーマ	指定の学習内容
独立運動のはじまりと発展（独立達成に至るまで）	<ul style="list-style-type: none"> 独立運動の発展：ナショナリズムと政治イデオロギーが担った役割とその相対的重要性 独立運動の発展：宗教、民族、および社会的・経済的要因が担った役割とその相対的重要性 独立運動の原因や「促進剤」としての戦争 独立運動の発展を促進したその他の内的・外的要因
独立運動の手段と成功の理由	<ul style="list-style-type: none"> 独立達成のための手段（暴力的方法、非暴力的方法を含む） 独立運動における指導者の役割と重要性 独立運動の成功におけるその他の要因の役割と相対的重要性
新国家が最初の10年間に直面した課題とそれに対する取り組み	<ul style="list-style-type: none"> 課題：政治問題、民族運動、分離独立運動 社会・文化・経済面の課題 これらの課題に対する取り組みとその効果

このトピックの学習で使用できる例

以下の例はあくまでも提案です。これらの例を使って授業を行うこともできますが、教師と生徒のニーズや興味に応じて別の適切な例を使うこともできます。

アフリカと中東：ベン・ベラとアルジェリア、エンクルマとガーナ、ケニヤッタとケニア、ムガベとローデシア（ジンバブエ）

南北アメリカ：ホセ・マルティとキューバ、ホセ・デ・サン・マルティンとリオ・デ・ラ・プラタ副王領、ボリバルと大コロンビア、デサリーヌとハイチ

アジアとオセアニア：ネルー、ガンディーとインド、ジンナーとパキスタン、ソマレとパプアニューギニア、ホー＝チ＝ミンとベトナム

ヨーロッパ：コロクトロニスとギリシャ、コシュート・ラヨシュとハンガリーにおける二重帝国の成立（1867年）、マイケル・コリンズ、エイモン・デ・ヴァレラとアイルランド

世界史トピック9：民主主義国家の発展（1848–2000年）

このトピックでは、19世紀半ばから20世紀終わりにかけての複数政党制の民主主義国家の発展を扱います。このトピックの重点は、民主主義国家の出現と、それら国家が民主主義的活動を維持・拡大しようとした際（失敗に終わった場合も含む）に直面した課題について探究することです。また、社会、経済、政治に関する問題への取り組みと、憲法上の権利の拡大についても探究します。試験答案では、特定の民主主義国家に言及することが要求され、またいくつかの設問では、異なる地域に属する複数の国家について論じることが要求されます。生徒が指定の学習内容のすべての側面を有意義に比較できるようになるため、少なくとも3つの民主主義国家を学習することが推奨されます。

学習テーマ	指定の学習内容
民主主義国家の出現	<ul style="list-style-type: none"> ・ 民主改革を求める動きが高まった要因: 戦争の余波と政治的激変、政治的・社会的・経済的要因、外部からの影響 ・ 指導者の役割と重要性 ・ 政党、憲法、選挙制度の発展、これらの発展の重要性と影響
民主主義国家の発展	<ul style="list-style-type: none"> ・ 民主主義国家の発展に影響を及ぼした要因: 移民、イデオロギー、経済勢力、外国からの影響 ・ 国内の危機への対処とその影響 ・ 平等実現のための闘い、参政権運動、市民抗議運動
民主制が社会に及ぼした影響	<ul style="list-style-type: none"> ・ 社会経済に関連する政策と改革: 教育、社会福祉、女性や社会的少数者に対する政策、富の分配 ・ これらの政策がどの程度国民の利益になったのか ・ 文化面での影響、芸術とメディアにおける表現の自由

このトピックの学習で使用できる例

以下の例はあくまでも提案です。これらの例を使って授業を行うこともできますが、教師と生徒のニーズや興味に応じて別の適切な例を使うこともできます。

アフリカと中東：南アフリカ、イスラエル、レバノン、ガーナ
 南北アメリカ：アルゼンチン、メキシコ、ベネズエラ、チリ
 アジアとオセアニア：インド、日本、マレーシア、オーストラリア
 ヨーロッパ：スペイン、イタリア、ドイツ、チェコ共和国、ポーランド

世界史トピック10：独裁主義的国家（20世紀）

このトピックでは、20世紀に独裁主義的国家の出現を促進した要因と、政党や指導者が権力を掌握しそれを維持するために用いた方法に焦点をあてます。権力の出現、強化、維持について、また指導者の国内政策と外交政策が権力維持にどのような影響をもたらしたのかを探究します。試験答案では、特定の独裁主義的国家に言及することが要求され、またいくつかの設問では、異なる地域に属する複数の国家について論じることが要求されます。生徒が指定の学習内容のすべての側面を有意義に比較できるようになるため、少なくとも3つの独裁主義的国家を学習することが推奨されます。

学習テーマ	指定の学習内容
独裁主義的国家の出現	<ul style="list-style-type: none"> ・独裁主義的国家が出現するに至った状況：経済的要因、社会的分裂、戦争の影響、政治制度の脆弱性 ・独裁主義的国家の設立のために用いられた方法：説得と強制、指導者の役割、イデオロギー、武力の行使、プロパガンダ
権力の強化と維持	<ul style="list-style-type: none"> ・法的手段の使用、武力の行使、カリスマ的指導力、プロパガンダ ・反対勢力の性質と規模、および反対勢力への対処 ・外交政策の成功と失敗が権力の維持に及ぼした影響
政策のねらいと結果	<ul style="list-style-type: none"> ・国内政策のねらいと影響、政治・文化・社会面の政策 ・政策が女性や社会的少数者に与えた影響 ・独裁的支配とその達成の度合い

このトピックの学習で使用できる例

以下の例はあくまでも提案です。これらの例を使って授業を行うこともできますが、教師と生徒のニーズや興味に応じて別の適切な例を使うこともできます。

アフリカと中東：タンザニア－ニエレレ、エジプト－ナーセル、イラク－サッダーム・フセイン、ケニア－ケニヤッタ、ウガンダ－アミン

南北アメリカ：アルゼンチン－ペロン、キューバ－カストロ、チリ－ピノチェト、ハイチ－デュヴァリエ、ニカラグア－ソモサ

アジアとオセアニア：中国－毛沢東、インドネシア－スカルノ、パキスタン－ジア＝ウル＝ハク、カンボジア－ポル・ポト

ヨーロッパ：ドイツ－ヒトラー、ソ連－スターリン、イタリア－ムッソリーニ、スペイン－フランコ、ポーランド－ピウスツキ

世界史トピック11：20世紀の戦争の原因と結果

このトピックでは、20世紀の戦争の原因、過程、結果に焦点をあてます。戦争が起こった原因や、戦争の種類と使用された技術などを含む戦争の行われ方、そしてこれらの要因が結果に及ぼした影響について探究します。試験答案では、20世紀に起こった特定の戦争に言及することが要求され、またいくつかの設問では、複数の地域の戦争について論じることが要求されます。このトピックで学習する例には、第一次世界大戦や第二次世界大戦のようにD Pの「歴史」の地域区分をまたいで起きた戦争が含まれています。試験の設問が異なる地域の戦争の例について議論することを要求している場合は、地域をまたぐ戦争を特定の地域に関連させて論じることができません（例：太平洋における第二次世界大戦）、同じ答案で同じ戦争を別の地域に関連させて論じることができません（例：ヨーロッパにおける第二次世界大戦）。

学習テーマ	指定の学習内容
戦争の原因	<ul style="list-style-type: none"> ・ 経済、イデオロギー、政治、領土に関連する原因とその他の原因 ・ 短期的要因と長期的要因
戦争の過程と結果への影響	<ul style="list-style-type: none"> ・ 戦争の種類：内戦、国家間の戦争、ゲリラ戦 ・ 技術開発、交戦圏-陸、海、空 ・ 人と経済資源の動員の度合い ・ 外国勢力の関与や影響
結果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 和平調停の成功と失敗 ・ 領土変更 ・ 政治的影響 ・ 経済・社会・人口への影響、女性の役割や地位の変化

このトピックの学習で使用できる例

以下の例はあくまでも提案です。これらの例を使って授業を行うこともできますが、教師と生徒のニーズや興味に応じて別の適切な例を使うこともできます。

アフリカと中東：アルジェリア戦争（1954-1962年）、ナイジェリア内戦（1967-1970年）、イラン・イラク戦争（1980-1988年）、北イエメン内戦（1962-1970年）、第一次湾岸戦争（1990-1991年）

南北アメリカ：チャコ戦争（1932-1935年）、フォークランド（マルビナス）紛争（1982年）、メキシコ革命（1910-1920年）、コントラ戦争（1981-1990年）

アジアとオセアニア：国共内戦（1927-1937、1946-1949年）、ベトナム戦争（1946-1954、1964-1975年）、印パ戦争（1947-1949、1965、1971年）

ヨーロッパ：スペイン内戦（1936-1939年）、バルカン戦争（1990年代）、ロシア内戦（1917-1922年）、アイルランド独立戦争（1919-1921年）

地域をまたぐ戦争：第一次世界大戦（1914-1918年）、第二次世界大戦（1939-1945年）、日露戦争（1904-1905年）

世界史トピック12：冷戦：超大国間の緊張と対立（20世紀）

冷戦は、第二次世界大戦の終了から1990年代前半にかけての世界情勢に大きな影響を及ぼしました。このトピックでは、なぜ超大国間の対立関係が停滞せず、指導者のスタイルやイデオロギー的信条の強さ、経済要因、依存国の危機状況などに応じて変化したのかに焦点をあてます。冷戦の指導者と関係国、および複数の地域の危機について学習することを義務づけ、それにより国際的な視点から冷戦を理解するよう促すのが、このトピックのねらいです。

学習テーマ	指定の学習内容
対立関係、不信、和解	<ul style="list-style-type: none"> ・ 同盟の破綻とヨーロッパおよびアジアの超大国間対立の出現（1943-1949年）：イデオロギーが果たした役割、恐怖と敵意、経済的関心、アメリカとソ連が果たした役割の比較 ・ アメリカ、ソ連、中国の超大国間の関係（1947-1979年）：封じ込め、平和共存、中ソ関係と米中関係、デタント ・ 対立と和解、冷戦終結の理由（1980-1991年）：イデオロギーの対立と不一致、経済問題、軍拡競争
指導者と国家	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2人の指導者（異なる地域から選択）が冷戦の過程に及ぼした影響 ・ 冷戦の緊張が2つの国（ソ連とアメリカ以外）に及ぼした影響
冷戦が引き起こした危機	<ul style="list-style-type: none"> ・ 冷戦が引き起こした危機の事例研究：異なる地域の2つの危機の詳細な事例研究：2つの危機の原因、影響、重要性の考察と比較

このトピックの学習で使用できる例

以下の例はあくまでも提案です。これらの例を使って授業を行うこともできますが、教師と生徒のニーズや興味に応じて別の適切な例を使うこともできます。

指導者の例

トルーマン、スターリン、フルシチョフ、ニクソン、毛沢東、カストロ、ブレジネフ、レーガン、ゴルバチョフ、ナーセル、ブランド

冷戦が引き起こした危機の例

アフリカと中東：スエズ危機（1956年）、コンゴ（1960-1961年）、アンゴラ内戦（1975年）

南北アメリカ：キューバ危機（1962年）、アメリカのチリ介入（1973年）、コントラ戦争（1981-1990年）

アジアとオセアニア：沖合群島危機（1954、1958年）、北朝鮮の韓国侵攻（1950年）、ソ連のアフガニスタン侵攻（1979年）

ヨーロッパ：ベルリン封鎖（1948-1949年）、ベルリンの壁（1958-1961年）、ハンガリー（1956年）、プラハの春（1968年）、ソ連と東ヨーロッパ（1981-1989年）

HL 選択項目

「HL 選択項目」は、特定地域の歴史を掘り下げて学習する機会をもたらします。教師は、以下の4つの「HL 地域選択項目」から **1項目** を選択してください。

- ・ アフリカと中東の歴史
- ・ 南北アメリカの歴史
- ・ アジアとオセアニアの歴史*
- ・ ヨーロッパの歴史

どの地域を選択した場合も、各地域に用意された18のセクションから3セクションを選択して学習する必要があります。

* 日本語の評価では、地域選択項目として「アジアとオセアニアの歴史」、「ヨーロッパの歴史」のみが提供されます。

HL 選択項目 1：アフリカと中東の歴史

用意された 18 のセクションから、学習対象として**3つ**のセクションを選択してください。なお、試験問題は、「指導の手引き」に記載のある人物と出来事以外からは出題されません。

日本語で提供される試験は「アジアとオセアニアの歴史」、「ヨーロッパの歴史」のみです。このため、「アフリカと中東の歴史」の内容は、日本語版の「指導の手引き」には含まれていません。この項目についての詳しい情報は、英語版の「指導の手引き」を参照してください。



図 4

アフリカと中東の地図

HL 選択項目 2：南北アメリカの歴史

用意された 18 のセクションから、学習対象として**3つ**のセクションを選択してください。なお、試験問題は、「指導の手引き」に記載のある人物と出来事以外からは出題されません。

日本語で提供される試験は「アジアとオセアニアの歴史」、「ヨーロッパの歴史」のみです。このため、「南北アメリカの歴史」の内容は、日本語版の「指導の手引き」には含まれていません。この項目についての詳しい情報は、英語版の「指導の手引き」を参照してください。



図 5

南北アメリカの地図

HL 選択項目 3：アジアとオセアニアの歴史

後述の 18 のセクションから、学習対象として**3つ**のセクションを選択してください。なお、試験問題は、この「指導の手引き」に記載のある人物と出来事以外からは出題されません。



図 6

アジアとオセアニアの地図

1：貿易と交流：中世の世界におけるシルクロード（750-1500 年）

このセクションでは、750年から1500年までの期間に焦点をあて、「シルクロード」と呼ばれた一連の交易路について学習します。シルクロードが果たした役割を、地域間の貿易の促進という観点からだけでなく、思想や文化の伝播という観点からも考察します。モンゴル帝国がシルクロードに対して及ぼした影響と、15世紀のシルクロードの衰退と分断の原因が、このセクションの重要な要素となります。

- ・ 唐の時代のシルクロード

- ・ 東西を結ぶ道：地域間の貿易、旅行者と探検家、商人、宣教師と巡礼者、イブン＝バトゥータとマルコ＝ポーロ
- ・ モンゴル帝国支配下での貿易の拡大：モンゴルの拡大とモンゴル帝国が貿易の再建と拡大に果たした役割、モンゴル帝国の政治的中心地の確立、ティムール、サマルカンド
- ・ 政治と文化の融合：それまで孤立して存在していた遊牧民社会のつながり、異なる区域の政治的統合
- ・ 文化の相互関係と文化交流：宗教思想と芸術の伝播
- ・ 15世紀の衰退の原因、海上貿易の発展、モンゴル帝国滅亡後の政治的・文化的・経済的な統一性の弱まりと崩壊

2：日本の武家時代（1180-1333年）

このセクションは、鎌倉時代の日本と、この時代に拡大した武士の役割に焦点をあてます。武士の政治的影響力の高まりのほか、武士の生活の特徴や武士が日本の社会と文化に与えた影響を探究します。このセクションでは、対立する氏族の間で起こった国内の戦いと、13世紀後半に日本侵攻を図ったモンゴル帝国の元朝という国外勢力との戦いの両方を学習します。

- ・ 源平合戦（治承・寿永の乱）（1180-1185年）と鎌倉幕府の成立
- ・ 源氏支配下での武士の役割の拡大、武力と経済力の増大、朝廷から武家政権へ、立法における役割
- ・ 氏族間の争い
- ・ 初の武家政権の成立、天皇の権力の衰退
- ・ 武士の生活：侍の精神および倫理規定である「武士道」、集団への忠誠と規律の重視、仏教の影響、武士の武器と甲冑、武家の女性の役割
- ・ 武士が日本の社会と文化に与えた影響
- ・ 元寇と「神風」（1274、1281年）

3：東アジアと東南アジアの探検、貿易、交流（1405-1700年）

このセクションは、ヨーロッパと東アジア諸国がこの地域で行った探検の理由と影響に焦点をあてます。入植者たちが先住民社会に与えた影響に重点を置きながら、ヨーロッパ諸国による初期の入植について学習します。また、中国と日本の「内向化」および鎖国政策の背後にある動機についても考察していきます。このセクションは、貿易に重点を置きますが、社会面・文化面での交流や相互作用についても学習することが求められます。

- ・ 中国の「外への関心」：中国の造船計画、「朝貢船」、皇帝の船団の設立、鄭和の大航海、海外貿易の増加
- ・ 日本の「外への関心」：ポルトガルとの貿易の確立（1543年）、他のヨーロッパ諸国からの交易商人の到来、宣教師

- ・ インド・ヨーロッパ間の貿易開始の重要性とその影響：ヴァスコ＝ダ＝ガマ（1498年）、マラッカ王国占領（1511年）、マゼランの航海（1519年）
- ・ スペイン人、ポルトガル人、フランス人、オランダ人、イギリス人の遠征の理由と影響、およびその入植の性質、ヨーロッパからの入植者が先住民に与えた影響、社会・宗教・文化の交流、人口と領土の変化
- ・ 中国の「内向化」：中国の孤立主義の高まり、孤立政策、外航船の破壊（1525年）をはじめとする船への制限
- ・ 日本の「内向化」：17世紀の日本の孤立主義、外国人の出入国を制限した鎖国政策、貿易と商業に対する厳しい規制、4つの「玄関口」の設立
- ・ 孤立政策が中国と日本に与えた社会的・政治的・経済的影響

4：ムガル帝国の隆盛と衰退（1526-1712年）

このセクションでは、インド亜大陸にヨーロッパ人が到来する前の最後の王朝について詳しく学習します。権力の掌握と強化、およびムガル支配に対する反対勢力について考察していきます。このセクションは、バーブルによってムガル帝国が建国された1526年からバハードゥル・シャー1世が死去した1712年までの期間を扱います。

- ・ ムガル権力の起源と隆盛：バーブルとフマーユーン
- ・ インド亜大陸におけるムガル支配の強化：国内政策、軍事政策、宗教政策、経済政策、文化政策
- ・ ムガル帝国の指導者それぞれの重要性：アクバル、シャー・ジャハーン1世、アウラングゼーブ
- ・ ムガル帝国の宗教間の協調と対立がもたらした影響
- ・ 国内の抵抗の理由と影響
- ・ 社会面・文化面・経済面の功績
- ・ ムガル帝国衰退の内的要因と外的要因

5：東南アジアの植民地主義とナショナリズムの発展（1750-1914年）

このセクションは、ヨーロッパとアメリカ合衆国の帝国主義体制と植民地化政策が東南アジアの先住民社会と政治システムに与えた影響に焦点をあてます。東南アジアへの植民地拡張の理由と、植民地化の性質および影響について分析します。また、植民地制度や、現地の人々の入植者に対する反応の類似点と相違点、さらにナショナリズムの高まりを導いた要因も検証していきます。セクションの最後には、第一次世界大戦の勃発までにこれらの国々でどの程度ナショナル・アイデンティティーが形成されたかを考察します。

- ・ インドネシアにおけるオランダ植民地制度の政治構造と経済的・社会的・文化的影響：文化制度、強制裁培制度、自由主義政策、オランダ東インド会社の衰退、オランダ国家による管理の強化と倫理政策の導入（1901年）
- ・ インドシナにおけるフランス植民地制度の政治構造と経済的・社会的・文化的影響：フランス領インドシナの成立（1887年）を導いた要因

- ・ フィリピンにおけるスペイン植民地制度の政治構造と経済的・社会的・文化的影響：フィリピン独立革命（1896年）、リサル、ボニファシオ、アギナルドが果たした役割の重要性
- ・ フィリピンとアメリカ合衆国：米西戦争（1898）、アメリカ合衆国による植民地支配
- ・ インドネシア、フィリピン、インドシナにおけるナショナリズムの高まり
- ・ シヤム王国、独立維持の内的要因と外的要因、ラーマ4世（モンクット）、ラーマ5世（チュラロンコン）

6：インド、アフガニスタン、ビルマ（1750-1919年）

このセクションは、ヨーロッパ帝国主義のインド亜大陸とその周辺国への進出と、その結果生じたイギリス、フランス、ロシアの対立に焦点をあてます。この地域への進出の理由と、最終的に統治権を得たイギリスによる支配の性質と影響について分析します。また、イギリス支配に対する抵抗運動の成功と失敗についても考察していきます。

- ・ イギリス東インド会社の拡大：プラッシーの戦い（1757年）、マラーター戦争、マイソール戦争
- ・ インドにおけるイギリス植民地制度の経済的・社会的・文化的影響、イギリス東インド会社の役割（1773-1857年）、ジェームズ・ラムゼイ（初代ダルハウジー侯爵）とウィリアム・ベンティンクによる政策の影響
- ・ インド大反乱（1857年）の原因、インド大反乱が招いた政治的・社会的・経済的結果
- ・ 1858年から1914年までの主要な展開：インド統治法（1858年）、ベンガル分割（1905年）、モーリー＝ミント改革（1909年）、第一次世界大戦の勃発、イギリス領インド帝国の社会的・経済的影響
- ・ 合憲団体の発展とその重要性、「国民意識」の高まり、インド国民会議（1885年）と全インド・ムスリム連盟（1906年）
- ・ アフガニスタン：イギリスとロシアの対立、「グレート・ゲーム」、北西辺境州、第一次、第二次、第三次アングロ・アフガン戦争、アフガニスタン王家の政策、イギリスによる影響への抵抗
- ・ ビルマ：ミンドン王、ティーボー王、独立性の喪失の理由、第一次、第二次、第三次英緬戦争、ビルマにおけるイギリス植民地制度の経済的・社会的・文化的影響、抵抗運動とナショナリズムの高まり

7：伝統的な東アジア社会への挑戦（1700-1868年）

このセクションは、18世紀半ばから19世紀半ばまでの「帝国」としての中国と日本に焦点をあて、これらの国が欧米列強の到来とそれに伴った貿易、外交代表、市民権の要求といった問題にどのように対処したかを考察していきます。欧米列強の到来と同時期に起こった国内の社会・経済の変化は、中国と日本の既存政権の権力維持に圧力をかけることになりました。

- ・ 清朝の皇帝支配の性質と構造、乾隆帝

- ・ 国内からの挑戦の原因と結果、白蓮教徒の乱
- ・ 中国の朝貢制度と西洋の貿易使節団
- ・ 第一次、第二次アヘン戦争の原因と結果、不平等条約
- ・ 太平天国の乱：盛衰の理由、中国社会への影響
- ・ 日本の徳川幕府の支配、経済と社会の構造
- ・ 国内からの挑戦、社会・経済の変化と不満の理由
- ・ ペリー来航と幕末日本の危機（1853-1868年）、徳川幕府の衰退の理由

8：オセアニアにおけるイギリスの植民地主義と ナショナル・アイデンティティーの出現（1788-1919年）

このセクションは、19世紀半ばから20世紀前半にかけてのオーストラリア、ニュージーランド、太平洋諸島におけるイギリスの植民地支配の理由と性質に焦点をあてます。入植者が先住民社会に与えた影響の大きさと性質について、さらに入植者と先住民の対立の理由を考察していきます。セクションの最後には、オーストラリアとニュージーランドの発展における第一次世界大戦の重要性について分析します。

- ・ 先住民社会と初期の植民地移住による影響、ワイタンギ条約（1840年）
- ・ 入植計画、オーストラリアとニュージーランドへの移住、初期の植民地移住、土地分配、牧畜社会、スクオッターと土地選択法
- ・ 先住民と入植者の間の緊張関係の理由と影響
- ・ ゴールドラッシュの社会的・経済的影響、都市の発展、労働運動の出現
- ・ 憲法の発展、ナショナル・アイデンティティーの高まり、オーストラリア連邦結成運動、オーストラリア連邦憲法制定会議、自治領としての地位の獲得（1901年オーストラリア、1907年ニュージーランド）
- ・ 第一次世界大戦がオーストラリアとニュージーランドに与えた政治的・社会的・経済的影響、オーストラリア・ニュージーランド軍団（ANZACs）、ガリポリの重要性
- ・ 太平洋諸島におけるイギリスの統治の性質と影響

9：東アジアの初期の近代化と帝国の衰退（1860-1912年）

このセクションは、19世紀半ばから20世紀初頭までの中国と日本の歴史的展開に焦点をあてます。まずは、中国においてほぼ不成功に終わった近代化と改革について考察します。保守派と大衆による変化への抵抗は、洋務運動や戊戌の変法の頓挫、義和団事件の発生からもうかがえます。一方で、中国とは対照的に、日本はこの時期に急速な近代化に成功し、アジアのなかで欧米列強の権力に対抗する国家へと成長しました。

- ・ 同治中興と洋務運動（1861-1894年）、西太后
- ・ 日清戦争敗北の影響（1894-1895年）、光緒帝と戊戌の変法（1898年）
- ・ 義和団事件（1900-1901年）、清朝末期の改革
- ・ 孫文と辛亥革命（1911年）の原因、革命失敗の理由

- ・ 明治維新（1868年）、大日本帝国憲法（1889年）
- ・ 明治時代の日本の社会・文化・経済の発展
- ・ 日本の軍事力増強、日清戦争（1894-1895年）と日露戦争（1904-1905年）の勝利
- ・ 朝鮮の鎖国：閔妃、開国（1876年）、甲午農民戦争（1894年）、日本の韓国併合（1910年）

10：インドのナショナリズムと独立（1919-1964年）

このセクションは、第一次世界大戦の終結、独立の達成、そして国家の発展へと推移した1919年から1964年までのインドのナショナリズムに焦点をあてます。鍵となった団体や人物の重要性、インド亜大陸の分離独立の原因、さらに分離独立後にインド国家の権力を強化した国内政策について分析します。

- ・ 第一次世界大戦の影響：自治の要求
- ・ アムリットサル事件（1919年）をはじめとする主な政治展開の重要性、インド統治法（1919年）、サイモン委員会（1928年）、英印円卓会議（1930-1932年）、1935年のインド統治法に対する反応
- ・ 主な団体および人物が果たした役割とその重要性：インド国民会議と全インド・ムスリム連盟、ガンディー、ジャワハルラール・ネルー、ジンナー
- ・ 独立闘争、非協力運動、不服従運動、塩の行進（1930年）、クイット・インド運動（1942年）
- ・ イスラーム分離主義の拡大、「二民族論」、ラホール決議（1940年）
- ・ 第二次世界大戦の影響：チャンドラ・ボース、クリップス使節団（1942年）、イギリス権力の弱体化、マウントバッテン、独立の達成、インド亜大陸の分離独立（1947年）の理由
- ・ 独立後のインド：民族紛争と宗教紛争、藩王国、カシミール、ネルーの国内政策の成功と失敗

11：日本（1912-1990年）

このセクションでは、明治時代終焉後の日本と、当時の日本が議会制民主主義制度の確立に失敗した理由を学習します。また、満州と中国での侵略行為を引き起こすこととなった軍国主義と過激なナショナリズムの台頭、そして「大東亜共栄圏」と呼ばれる東アジア、東南アジア、太平洋にまたがる大日本帝国の建設の試みについても探究します。

- ・ 第一次世界大戦と戦後会議の影響
- ・ 大正デモクラシー：自由主義的価値観の発展と二大政党制の出現
- ・ 軍国主義および過激なナショナリズムの台頭の理由とその影響：軍の政治的影響力の増大、政治クーデターと暗殺
- ・ 満州事変（1931年）と中国侵略（1937年）、欧米諸国との関係への影響、日独伊三国同盟（1940年）、アメリカ合衆国の禁輸措置（1940年）

- ・ 日本と太平洋戦争（1941-1945年）：パールハーバー（真珠湾）奇襲の決定、初期段階の成功、敗北の理由
- ・ アメリカ合衆国の占領（1945-1952年）：社会的・政治的・文化的変化、「逆コース」（1950年）
- ・ 日本の「経済の奇跡」（高度経済成長）の理由、グローバル化による社会面・文化面・経済面の影響

12：中国と朝鮮（1910-1950年）

このセクションは、1910年から1950年にかけての中国と朝鮮に焦点をあてます。中華民国成立後の中国で起きたナショナリズムと共産主義の台頭、さらに1910年の韓国併合によって公式化され、日中戦争の間にさらに圧政的になった、日本による朝鮮支配の性質について考察します。セクションの最後には、国共内戦で中国共産党はなぜ勝利したのか、そして中国国民党にとってこの敗北が何を意味したのかについて考察します。

- ・ 中国のナショナル・アイデンティティーの形成：袁世凱、孫文、対華21カ条要求（1915年）、新文化運動、ヴェルサイユ条約（1919年）、五四運動（1919年）、軍閥主義の影響
- ・ 中国国民党の統治：中国国民党の統率力とイデオロギー、蒋介石、「南京十年」（1927-1937年）の間の国内政策の成功と失敗
- ・ 中国における共産主義の台頭：中国共産党のイデオロギー、第一次国共合作、上海クーデター（1927年）、延安、江西ソヴィエト、長征、毛沢東
- ・ 日本による中国侵略の影響、満州（1931年）、第二次国共合作、日中戦争（1937-1945年）、国共内戦（1946-1949年）、対立の性質、中国共産党の勝利の理由
- ・ 日本による朝鮮支配の影響：韓国併合（1910年）の社会的・政治的・経済的影響、日中戦争の朝鮮への影響：日本による強制労働と徴兵、慰安婦、朝鮮半島の38度線による分割（1945年）、李承伴、金日成
- ・ 台湾と中華民国：蒋介石による統治の性質：戒厳令（1949年）、白色テロ（1950年）、台湾独立運動のはじまり

13：東南アジアにおける世界大戦の影響

このセクションは、第一次世界大戦と第二次世界大戦が東南アジアにもたらした変化に焦点をあてます。この地域は2度の大战のどちらからも影響を受けましたが、特に第二次世界大戦による影響はより直接的なものでした。第一次世界大戦とヴェルサイユ条約は、民族自決やナショナリズムといった政治的概念を東南アジアに広めるきっかけになりました。そして第二次世界大戦では、植民地保有国が日本に敗北したことによりヨーロッパ列強の威信が失墜し、これによって民族主義者たちは独立を主張する機会を得ることになりました。

- ・ 第一次世界大戦の影響、ヴェルサイユ条約（1919年）
- ・ 戦争初期に日本が東南アジアで収めた勝利の理由と影響（1940-1942年）

- ・ 日本による占領の性質と影響
- ・ オランダ領東インド（インドネシア）での戦争中に発展したナショナリズムと独立運動が果たした役割、ベトナム、マラヤ：抵抗と協調
- ・ 指導者の出現と影響：スカルノ、ホー＝チ＝ミン、トゥンク・アブドゥル・ラーマン
- ・ インドネシア独立（1949年）の理由
- ・ 東南アジアの任意の1国の事例研究（このセクションですでに記載のある国以外から選択）：第一次世界大戦と第二次世界大戦の政治・社会・経済への影響

14：中華人民共和国（1949-2005年）

このセクションでは、中国共産党の統治下の中国に焦点をあて、毛沢東指導下の共産党がその支配と社会主義国構想を拡大することによって生じた大きな変化について学習します。国内政策が政治・社会・経済に及ぼした影響に重点を置き、さらには毛沢東の死後の中国経済の近代化についても考察します。

- ・ 毛沢東指導下での共産主義国家の確立（1949-1961年）、主要な政策、土地改革、整風運動、百花斉放百家争鳴（1956年）
- ・ 社会主義への移行、経済発展の成功と失敗（1949-1961年）、第一次五カ年計画、大躍進政策、第二次五カ年計画
- ・ 社会の発展、女性の権利、保健、教育
- ・ 文化大革命：理由、「四人組」、政治・社会・文化への影響
- ・ 外交政策と外交問題（1949-1976年）、米中関係、中ソ関係の確立と破綻、地域大国および世界の大国としての中国
- ・ 毛沢東の死後の権力闘争、華国鋒、鄧小平の復活と「四人組」の打倒
- ・ 鄧小平指導下の中国（1976-1997年）、経済の発展、「四つの近代化」、政治展開、天安門事件（1989年）の原因と結果、江沢民

15：アジアの冷戦

このセクションは、第二次世界大戦後のアジアにおける冷戦と共産主義の影響に焦点をあてます。マラヤ、朝鮮半島、ベトナム、カンボジア、アフガニスタンで紛争が勃発した理由と、これらの紛争の性質、および外国勢力の関与の重要性について考察します。また、これらの紛争がその後10年にわたって及ぼした影響についても分析します。

- ・ マラヤ：「非常事態」（1948-1960年）、マラヤ共産党、イギリス（イギリス連邦）の反応、紛争の性質、解決と「遺産」
- ・ 朝鮮半島：朝鮮戦争（1950-1953年）：原因、国際社会の反応、結果、朝鮮半島の政治経済への影響
- ・ ベトナム：ベトナム独立同盟会（ベトミン）、ホー＝チ＝ミン、第一次インドシナ戦争（1946-1954年）、ベトナム戦争（1956-1975年）：原因、戦争の性質、国際関与、結果、ベトナムの政治経済への影響

- ・カンボジア：シハヌークによる支配の失敗、クメール・ルージュのイデオロギー、ポル・ポト、ベトナム戦争の影響、クメール・ルージュ政権の性質と影響、ベトナムによるカンボジア侵攻と内戦、国際社会の反応、1993年の選挙
- ・アフガニスタン：ソ連のアフガニスタン侵攻（1979年）の理由と影響、紛争の性質、国際関与、ソ連軍の撤退（1989年）、内戦（1989-1992年）

16：1947年以降の南アジアの発展と課題

このセクションは、1947年以降の南アジアの歴史に焦点をあて、新たに建設された国家であるパキスタン、バングラデシュ、セイロン（スリランカ）が直面した課題と、これらに対して政府や指導者がとった異なるアプローチについて考察します。また、この地域における紛争の理由と影響についても学習します。

- ・ネルー指導下の外交政策と経済の発展、インドとパキスタンの関係、印パ戦争（1947、1965、1971年）、原因と結果、バングラデシュの独立（1971年）
- ・インド：インディラ・ガンディー、ラジーヴ・ガンディー、ナラシンハ・ラーオ指導下における社会・政治・経済の発展と課題
- ・パキスタン（1947-1991年）：建国、社会、政治、経済の発展と課題、東パキスタンと西パキスタンの間の摩擦、文化と言語の違い、憲法をめぐる国民投票（1991年）、ジンナー、アイユーブ・ハーン、ズルフィカール・アリー・ブットー、ジア＝ウル＝ハク、ベーナズィール・ブットー
- ・バングラデシュ：建国、社会、政治、経済の発展と課題
- ・セイロン（スリランカ）：建国、社会、政治、経済の発展と課題、シンハラ人とタミル人の対立、1971年の反乱、内戦、シリマヴォ・バンダラナイケ

17：第二次世界大戦後のオセアニアの発展（1945-2005年）

第二次世界大戦中のアジアの動きは、オーストラリアとニュージーランドのイギリスへの依存を揺るがし、そのため両国は、日本の脅威と戦うためにアメリカ合衆国に助けを求めようになりました。また、日本の敗北を受けて戦略を変更した両国は、アメリカと同盟関係を築き、その結果、強い反共産主義路線をたどることになりました。オーストラリアもニュージーランドも、イギリスとヨーロッパだけでなく、1960年代にはアジア諸国からの移住も受け入れ始めたことにより、より多文化的な社会を築きました。また両国とも、世界情勢、特にアジアと太平洋の情勢に関して、国際機関でより積極的かつ独立した役割を担うようになりました。さらに、イギリスとのつながりが弱体化するにつれ日本との経済的なつながりが徐々に強化され、その後は中国や東南アジア、太平洋諸島の新興経済国ともつながりをもつようになりました。

- ・社会と文化の発展、女性の役割の変化、ナショナル・アイデンティティーの形成
- ・戦後のオーストラリアとニュージーランドへの移住、および多文化社会の発展
- ・オーストラリア政府の政策と達成：カーティン、チフリー、メンジーズ、ホイットラム、フレージャー、ホークとキーティング

- ・ ニュージーランド政府の政策と達成：フレーザー、ホリオーク、マルドゥーン、ロンギ、ボルジャー
- ・ オーストラリアとニュージーランドの先住民に対する態度と政策
- ・ オーストラリアとニュージーランド：外交政策と国際協調
- ・ 経済政策と経済再編：イギリスのE E C加盟（および後のE U加盟）、アジア経済の成長
- ・ 太平洋諸島の独立国家の出現の理由と結果

18：アジアの社会・文化・経済の発展（中国、日本、インドを除く） （1980-2005年）

このセクションでは、2つの事例研究を行うことが要求されます。生徒は、事例研究の対象としてアジアの2国を選択します（中国、日本、インドを除く）。なお、選択した国は、試験答案の冒頭部分に明記します。

- ・ グローバル化の影響：経済成長の理由と影響、技術の発展、都市化、人口構造の変化、生活水準の変化、観光業がもたらした経済的・社会的影響
- ・ 海外からの移民と自国民の海外移住：原因と結果
- ・ 社会問題と社会発展：社会構造の変化、男女の役割、環境、教育、医療改革、技術発展が社会にもたらした影響
- ・ 宗教：宗教の社会的役割、宗教間の対立と緊張
- ・ 文化の変化：伝統芸術や伝統文化の本質と変化、グローバル化がもたらした文化への影響、メディアの性質と役割
- ・ テロの出現とテロへの対応

HL 選択項目 4：ヨーロッパの歴史

ここでは**3**つのセクションを選択する必要があります。試験問題では、本ガイドに記載の人名と事象名のみが使用されます。



図7
ヨーロッパの地図

1：イングランドとフランスの君主制（1066～1223年）

本セクションはイングランドとフランスにおける王政の成立、特徴および本質の変化を扱います。それはノルマン人のイングランド侵入の衝撃に関係しています。ノルマン人のイングランド侵入は政府と統治組織に多大の変化をもたらしました。11世紀後半から12世紀の間にイングランドとフランスの君主制は、権力強化の要求を具体化することによりさらに洗練され、さらに強大になりましたが、他方、いずれにおいても貴族の力は依然として大きな役割を保持していました。

- ・ ノルマン人侵入以前のイングランドとノルマン人侵入の影響
- ・ イングランドのノルマン人：ウィリアム1世ノルマンディー公（イングランド王1066～1087年位）／権力の成立／国内および外交政策／ドゥームズデイ・ブック／ヘンリ1世（1100～1135年位）
- ・ アンジュー帝国：ヘンリ2世（1154～1189年位）／イングランド、アイルランドおよびガスコーニュにおける政策
- ・ ノルマンディー公国およびそのフランスとの関係：イングランド王としての歴代のノルマンディー公とフランス諸王の対立および戦争／ジョン、リチャード1世、ヘンリ2世およびフィリップ2世が果たした役割／イングランドとフランスにおける影響
- ・ カペー朝（1108～1223年）下のフランスにおける王領地と王権の拡張／ルイ6世、ルイ7世およびフィリップ2世の統治下におけるカペー朝の権力拡大、これらの政府の本質、および国王権力の拡張に成功した理由
- ・ イングランド王政とフランス王政の本質の比較

2：中世ヨーロッパのイスラーム教徒とユダヤ人（1095～1492年）

本セクションは、1095～1492年のヨーロッパにおけるユダヤ人とイスラーム教徒の体験の諸相を扱います。スペインとシチリア島には多数のイスラーム教徒がいました。スペインでは、イスラーム教徒の軍事征服およびイスラーム支配国家の樹立がその理由です。シチリア島では、多数のイスラーム教徒が移住し、11世紀末までに彼らはノルマン人の支配下に入りました。本セクションは、スペインおよびシチリア島におけるイスラーム教徒との共存の理由とその結果のみならず、イスラーム教徒に対する敵意の一般的理由について説明します。また、ユダヤ人の迫害の理由および結果についても考察します。

- ・ イスラーム教徒に対する敵意の理由：十字軍／イスラーム教勢力への恐怖／キリスト教の信条および教義
- ・ スペインでキリスト教徒がイスラーム教国に反抗した理由：宗教的動機／経済的野心
- ・ スペイン内でのキリスト教支配圏とイスラーム教支配圏の間の闘争の継続。および、その結果としてのキリスト教国とイスラーム教国の境界、たとえば地中海やバルカン半島における武力衝突／経済活動の衰退および文化的、知的多様性の低下／反イスラーム感情の発達
- ・ 中世ヨーロッパにおけるユダヤ人の役割と貢献：財政／交易／王室官僚制度と学問への貢献

- ・ ユダヤ人迫害の理由：十字軍時代の宗教的ヒステリー／公的または大衆、もしくはその両方の反ユダヤ主義および罪の転嫁／黒死病はユダヤ人に起因するという思い込み
- ・ ユダヤ人迫害の影響：虐殺／追放／社会からの隔離
- ・ ユダヤ人迫害の社会への影響：経済的、知的および文化的な生活における技能および能力の損失

3：中世後期の政治危機（1300～1487年）

本セクションは、継承問題の原因となった中世後期の数度にわたる王権の危機を扱います。また、王国間の紛争が、増税と政治への信頼の喪失による国内での政治的不安定を招きました。これらの紛争の原因と結果を理解するためには、紛争の端緒および主な関係国を考察する必要があります。

- ・ イングランドの継承危機：エドワード2世（1307～1327年位）／リチャード2世（1377～1399年位）
- ・ 百年戦争 1337～1360年 および 1369～1389年：原因、経過、影響および意味
- ・ 百年戦争 1415～1453年：戦争再開の理由／アキテーヌの重要性／結末とその理由／イングランドとフランスへの影響
- ・ ブルゴーニュ公国（1363～1477年）の興亡
- ・ 15世紀イングランドとフランスにおける君主制の危機および王権への挑戦：バラ戦争と公益同盟戦争
- ・ 王権の特性および問題：イングランド—ヘンリ6世（1422～1461年位）／エドワード4世（1461～1483年位）。フランス—ルイ11世（1461～1483年位）
- ・ バラ戦争：原因／出来事／イングランドへの影響（政府および王権への影響を含む）

4：ルネサンス（1400頃～1600年）

本セクションは、14世紀イタリアにおけるルネサンス期の政治と社会の起源と特徴、また以降のヨーロッパにおけるルネサンスの拡大について考察します。イタリア諸都市の富と文化的活力はルネサンスにおいて決定的な役割を果たしました。強大な君主および教会のパトロンが政治的、経済的および権力的な理由から芸術を支援しました。この期間には、権力と国家の特質について新しい考えが出現した時代でもあります。

- ・ イタリアにおけるルネサンスの起源、理由および発展／フィレンツェの社会的および政治的状況
- ・ イタリアの都市国家における政治形態：ミラノ／フィレンツェ／ヴェネツィア
- ・ パトロンの重要性：ロレンツィオ・デ・メディチおよびルドヴィーコ・スフォルツァの役割と意味／ローマ教皇のパトロナジ
- ・ 文化的および知的発展：芸術／文学／建築および政治的著作
- ・ 北方ルネサンス：ブルゴーニュ公国地方およびドイツへの拡大
- ・ 本セクションでまだ扱っていないヨーロッパのある1カ国に対するルネサンスの拡大と影響についてのケーススタディー

5：大航海時代とその影響（1400～1550年）

西洋社会の富の増加と世俗化の進行は、長距離航海の発展に寄与した新しい科学技術の進歩と結びついていました。本セクションはアメリカ大陸に至る西方航路とインド洋および香料諸島に至る東方航路の探検と拡大に焦点を当てます。スペインとポルトガルによる探検の動機および探検が可能となった理由、そしてヨーロッパにおけるこれらの探検の影響を考察します。

- ・ 15世紀における探検の動機と探検が増加した理由：宗教と探検／国家および個人の競争／知の探求／贅沢品の新規交易経路の開拓
- ・ 探検が可能となった理由：支援（エンリケ航海王子の役割と重要性を含む）／造船、地図製作法および航海術の発展
- ・ ポルトガルによるアフリカ西岸の探検：重要性／結果／先住民への影響
- ・ 探検と新世界：重要性／結果／先住民への影響
- ・ 探検とインド洋：重要性／結果／先住民への影響
- ・ トルデシリャス条約（1494年）の重要性と影響
- ・ 1550年までのヨーロッパへの影響：ヨーロッパへの経済的影響／「コロンブス交換」

6：宗教改革（1517～1572年）

本セクションは、16世紀ヨーロッパにおける宗教上の変化に焦点を当てます。ドイツおよび他の地域におけるプロテスタント主義の発展について、その起源と拡大を含めて考察します。特にプロテスタント主義を保護、育成した国王と王子についても考察します。またプロテスタント主義拡大の宗教的理由についても焦点を当てます。本セクションはさらにプロテスタント主義に対する教皇およびカトリック権力の対応、そして1572年にまで及ぶ宗教戦争の発生も対象とします。

- ・ 16世紀初頭におけるヨーロッパのカトリック教会の状況、およびカトリック教会が批判された理由
- ・ ルターとカルヴァンの宗教思想と影響
- ・ 1547年までにドイツでルター派の思想拡大が成功した理由（ドイツ諸侯の態度を含む）
- ・ ドイツにおける宗教と紛争：農民戦争／シュマルカルデン同盟およびアウグスブルグの和議（1555年）
- ・ イングランド、スコットランド、フランス、オランダのいずれか任意の1カ国におけるプロテスタント思想拡大の役割および影響：宗教的要因／統治者のねらいと役割／経済的理由／大衆感情／宗教戦争
- ・ カトリック改革：精神運動／イエズス会と他のカトリック修道会／聖職者の教育および規律／トリエント公会議（1545～1563年）

7：絶対主義と啓蒙主義（1650～1800年）

本セクションは、ヨーロッパにおける啓蒙思想とその政治的影響に焦点を当てます。17世紀後半から18世紀前半にかけての絶対王政、次に「啓蒙専制主義」を考察して、18世紀後半における「啓蒙」君主による改革が実際にいかに重要であったかを学習します。この時代の芸術が君主による保護を受けていたことは、とても大切なことであり、生徒はルイ14世が支援した芸術／建築、またはヨーゼフ2世が支援したモーツァルトの音楽などの芸術的遺産について学習する機会があります。また都市が成長し農業改良が始まったことといった17世紀後半から18世紀における社会的、経済的な変化にも焦点を当てます。

- ・ 啓蒙思想の目標と展開／科学革命
- ・ ドイツ、イングランド、スコットランド、フランス、スペイン、オランダ共和国、イタリアのうちの任意の**2**カ国における啓蒙思想とその政治的影響についてのケーススタディー
- ・ 任意の**2**人の絶対君主のケーススタディー：彼らの統治の特性／彼らの権力のおよぶ範囲／外交政策
- ・ 任意の**2**人の啓蒙専制君主のケーススタディー：政策とその影響／変化の範囲
- ・ 啓蒙時代の社会的および経済的変化／都市の成長／農業の変化
- ・ 君主制、パトロナジと芸術／バロック運動

8：フランス革命とナポレオン1世（1774～1815年）

本セクションはフランス革命の原因、発生、経過および影響を扱います。この時代のアンシャン・レジーム（旧体制）に対する社会的、経済的、政治的、知的な挑戦、そしてナポレオン＝ボナパルトの登場と支配をもたらした革命の進行段階に焦点を当てます。本セクションではナポレオンの国内および外交政策はもとより、フランスとヨーロッパの周辺国に対するフランス革命の影響の調査が必要となります。

- ・ アンシャン・レジームの危機：君主政、特にルイ16世の役割／知的、政治的、社会的、財政的、経済的問題
- ・ 君主政から共和政へ：革命の原因と意義／1791年憲法／君主政の運命／恐怖政治／ロベスピエール／テルミドールのクーデター
- ・ 革命の政治的、社会的、経済的影響／フランス革命戦争（1792～1799年）
- ・ フランス総裁政府の成立、本質および崩壊（1795～1799年）
- ・ ナポレオンの登場と支配（1799～1815年）／ナポレオンの国内および外交政策のフランスに対する影響
- ・ ナポレオン戦争（1803～1815年）／ナポレオン帝国の崩壊／軍事的敗北／百日天下

9：フランス（1815～1914年）

本セクションは、19世紀から1914年の第一次世界大戦勃発に至る20世紀初期までのフランスの歴史を考察します。王政および憲政双方の政治的变化に焦点を当てます。すなわちルイ18世とシャルル10世の統治、それに続くルイ・フィリップと1848年革命について

考察します。短期間で終わった第二共和政、それに続くルイ・ナポレオンの登場と第二帝政について、考察します。最後に、第三共和政について検討し、19世紀末のフランスの政治的状况を検証します。

- ・ブルボン復古王政、ウィーン体制およびそのフランスへの影響
- ・ルイ 18 世とシャルル 10 世の統治：政治と社会（1815～1830年）
- ・1830年の革命とルイ・フィリップの7月王政／7月王政が崩壊した理由
- ・1848年革命：第二共和政、鎮圧、ルイ・ナポレオンの登場と第二帝政
- ・ナポレオン 3 世と第二帝政：国内政策／安定性／対立／改革の時代／外交政策（クリミア戦争、そしてイタリアとメキシコへの干渉を含む）
- ・第三共和政（1871～1914年）：安定性と危機の問題 1871～1890年—共和政成立時の問題およびブーランジスム／1890～1914年—ドレフェス事件、政治的過激派の成長、腐敗

10：イギリスとアイルランドにおける社会、政治および経済（1815～1914年）

本セクションは、19世紀から第一次世界大戦勃発までの20世紀初期のイギリスの歴史に焦点を当てます。ナポレオン戦争終結時の社会的、政治的状况について、チャーティスト運動から穀物法の最終的な廃止に至る学習を通して社会運動や改革を含めて考察します。次に、ヴィクトリア朝時代の社会的、経済的变化、とりわけ19世紀イギリスの二大政党である自由党と保守党の出現について取り上げます。最後に、第一次世界大戦前のイギリスの社会および政治について、政治的危機、そして婦人参政権論者および労働組合の成長などの既存の体制に対する脅威を含めて説明します。

- ・社会的反抗（1815～1848年）：ピータールーの虐殺／チャーティスト運動—発生と失敗の理由／ピール首相による穀物法廃止—原因と結果／アイルランド飢饉
- ・参政権の拡大：選挙法改正（1832年、1867年および1884～1885年）の理由および結果／政党への影響
- ・ヴィクトリア朝時代の社会（1840年頃～1900年頃）：産業革命時の労働者階級の状態／都市の貧困、社会改革
- ・ディズレーリ、グラッドストーンおよびソールズベリー：国内政策／アイルランド問題
- ・20世紀初頭のイギリス：労働党の誕生／ロイド・ジョージと社会改革—「人民予算」と議会法
- ・エドワード朝イギリスにおける戦前の混乱および反抗：婦人参政権、アイルランド、労働組合

11：イタリア（1815～1871年）とドイツ（1815～1890年）

本セクションは、1815年以降のドイツとイタリアを扱います。イタリアについては、ウィーン会議から1871年まで、またドイツについては1890年までとします。イタリアと

ドイツ両国におけるウィーン体制の影響について、また 1815～1849 年の革命の原因、出来事および結果についての考察があります。また、ドイツ諸邦とイタリア半島での国民主義の発生と成長、そして統一のプロセスにおける社会的、経済的、政治的要因にも焦点を当てます。

- ・ イタリア (1815～1849 年): ウィーン会議のイタリアへの影響、オーストリアの支配、メッテルニヒの役割 / 国民主義と自由主義 / 1820 年から 1844 年までのイタリアにおける革命の企て / マッツイーニとジョベルティ / ローマ教皇の役割 / 1848～1849 年の革命—原因、本質、敗北および結果
- ・ ドイツ (1815～1849 年): ウィーン会議のドイツへの影響 / 三月革命時代の国民主義と自由主義 / 1848 年以前の経済的、社会的変化 / 1848～1849 年の革命—原因、本質、挫折および結果
- ・ イタリア統一 (1849～1871 年) / カヴールとガリバルディ / 外国勢力の役割
- ・ プロイセンの興隆とオーストリアの衰退 (1815～1866 年) / ドイツ関税同盟
- ・ ビスマルク、プロイセンおよび最終的統一: 外交、経済、軍事の再編成 / 統一戦争 / 1871 年憲法
- ・ ドイツ (1871～1890 年): ビスマルクの国内政策 (文化闘争と反社会主義運動を含む) / 新生ドイツ国家の統合とプロイセンの役割

12: 帝政ロシア、革命およびソヴィエト連邦の成立 (1855～1924 年)

本セクションは、帝政ロシアにおける近代化と保守主義、および皇帝の専制政治の最終的崩壊、そして 1917 年の革命、内戦およびレーニンの指導体制を扱います。変化と継続の概念に焦点を当て、変革をもたらした社会的、経済的、政治的要因について調査、考察します。

- ・ アレクサンドル 2 世 (1855～1881 年位): 改革の範囲
- ・ アレクサンドル 3 世 (1881～1894 年位) およびニコライ 2 世 (1894～1917 年位) の政策: 経済の近代化、皇帝の抑圧政治と反対派の成長
- ・ 1905 年の革命の原因 (社会的、経済的状态および日露戦争の意義を含む) / 1905 年革命の結末 (ストルイピンおよびドゥーマ (国会) を含む)
- ・ 第一次世界大戦の影響および 1917 年 2 月 (3 月) 革命における専制政治の終焉
- ・ 1917 年の革命: 2 月 (3 月) 革命 / 臨時政府と二重権力 (ソヴィエト) / 10 月 (11 月) 革命 / ボリシェヴィキ革命 / レーニンとトロッキー
- ・ レーニンのロシアとソヴィエト連邦 / 新生ソヴィエト国家への統合 / 内戦 / 戦時共産主義 / 新経済政策 (NEP) / 恐怖と強制 / 外交関係

13: ヨーロッパと第一次世界大戦 (1871～1918 年)

本セクションは、第一次世界大戦の短期的および長期的な起因を扱います。1914 年までのヨーロッパ外交関係の崩壊、そして国際関係に発生した危機を対象とします。また戦争

の遂行により軍事と国内の戦線がどのように影響を受けたかを考えます。本セクションはまた、連合国が勝利し、同盟国が敗北した原因についても考察します。

- ・ 1871年以降のヨーロッパ外交関係と勢力均衡の変化／アフリカとアジアにおける帝国主義的拡張とそれがヨーロッパ外交関係に与えた影響／ベルリン会議とヨーロッパ同盟体制
- ・ 皇帝ウィルヘルム2世の外交政策：ドイツ外交政策に影響を与えた国内状況／それが他国（イギリス、フランス、ロシア、オーストリア・ハンガリーなど）に及ぼした影響
- ・ 第一次世界大戦の原因：短期的および長期的原因／それぞれの原因の相対的重要性／同盟国体制／オスマン帝国の衰退／ドイツ外交政策／オーストリア・ハンガリー、ロシアおよびバルカン諸国のナショナリズム／軍拡競争と外交危機／1914年7月危機
- ・ 1914年から1918年の間に当該地域の**2**カ国の一般市民が受けた第一次世界大戦の影響
- ・ ドイツおよび他の同盟国を敗北に導いた要因および協商国（連合国）が勝利した要因／戦略的失敗／経済的要因／米国の参入と役割／同盟国内部の不安定性

14：両大戦間のヨーロッパ諸国（1918～1939年）

本セクションは、2度の世界大戦の間 のヨーロッパ主要国における**国内**での展開を扱います。ドイツ、イタリア、スペインおよび他の任意の**1**カ国の合計**4**カ国について学習する必要があります。本セクションは第一次世界大戦の結末の影響を考え、次に1920年代および1930年代の各国における経済的、社会的、文化的変化について考察します。

- ・ ヴァイマル時代のドイツ：憲法、政治、経済・財政および社会的問題（1918～1933年）／初期の課題（1918～1923年）／シュトレゼマンの下での「黄金時代」（1924～1929年）／危機の時代とヒトラーの登場（1929～1933年）
- ・ ヒトラーのドイツ（1933～1939年）：権力の統合／ヒトラーの戦前の国内政策（経済的、社会的、政治的政策を含む）／ナチス国家の本質／ナチスに対する抵抗の範囲
- ・ イタリア（1918～1939年）：ムッソリーニの登場／権力の統合／ムッソリーニの戦前の国内政策（経済的、社会的、政治的政策を含む）／ファシスト国家の特性
- ・ スペイン（1918～1939年）：スペインの政治的、社会的、経済的状态／プリモ・デ・リベラ体制／第二共和政下の対立と政党／アサーニャとヒル・ロブレス／内戦の原因／外国の関与／フランコ支配下のナショナリストが勝利した原因
- ・ 両大戦間におけるヨーロッパのいずれか**1**カ国（ドイツ、イタリア、スペインを除く）の国内の政治的、経済的、社会的展開のケーススタディー。

15：ヴェルサイユからベルリンへ：ヨーロッパの外交関係（1919～1945年）

本セクションは、1919年から1945年までのヨーロッパにおける国際関係を扱います。パリ講和会議の目標、影響、およびその合意事項に関連する問題から始めます。取り扱う

範囲は、国際連盟と多国間協定（連盟の機構外部）を通じた集団安全保障と国際協力の促進、軍備縮小、そして軍事力を用いない外交政策の目標追求の試みです。本セクションはまた、イタリア、ドイツ、フランス、イギリスおよびロシア／ソヴィエト連邦それぞれの外交政策について、各国のねらい、問題点および結果についても扱います。最後に、第二次世界大戦に関して、その影響およびドイツが敗北し連合国が勝利した理由に焦点を当てて考察します。

- ・ 講和条約（1919～1923年）：ヴェルサイユ条約／ヌイイ条約／トリアノン条約／サン・ジェルマン条約／セーヴル条約・ローザンヌ条約-意図、問題点および反応
- ・ 国際連盟とヨーロッパ：失敗と成功／集団安全保障の模索／中央および東ヨーロッパの後継国家における展開
- ・ イタリアとドイツの外交政策（1919～1941年）：意図、問題点および成功の範囲
- ・ 集団安全保障と宥和政策（1919～1941年）：意図、問題点および成功の範囲／イギリス、フランスおよびロシア・ソヴィエトの外交政策の役割（1919～1941年）／チェンバレンとミュンヘン危機
- ・ 第二次世界大戦の原因とヨーロッパ戦線の展開（1939～1941年）／戦時下の同盟（1941～1945年）／1945年に枢軸国が敗北し連合国が勝利した原因／経済的、戦略的および他の要因の役割
- ・ 1939年から1945年までの任意の2カ国における一般市民に対する第二次世界大戦の影響

16：ソヴィエト連邦と新生ロシア（1924～2000年）

本セクションは、1924年以降のソヴィエト国家の強化とその存続、発展およびソヴィエト連邦の国境内外における拡大のために採られた方策を検証します。スターリン、フルシチョフおよびブレジネフの登場と権力の本質、および政策を探究します。ソヴィエトのねらいと指導力に関する1945年以降の東西関係も考慮が必要です。最後に、ソヴィエト連邦の衰退と崩壊、そしてソヴィエト崩壊後の新生ロシアの政治的、経済的発展について考察します。

- ・ ソヴィエト連邦（1924～1941年）：スターリンと権力闘争（1924～1929年）／トロツキーの敗北／スターリンの集団農場化と5カ年計画の政策／スターリンの政府とプロパガンダ／追放と大粛清
- ・ 大祖国戦争（1941～1945年）の影響／戦後のソヴィエト連邦（1945～1953年）の政治的、経済的発展
- ・ フルシチョフとブレジネフ：国内政策と外交政策
- ・ ソヴィエト連邦の変遷（1985～1991年）：ゴルバチョフ（ねらい、政策および成功の範囲）／政治的発展と変化
- ・ ソヴィエト連邦の崩壊／2000年までの新生ロシア／エリツィンの役割と政策／2000年までの政治的、経済的発展

17：大戦後の西および北ヨーロッパ（1945～2000年）

本セクションは、大戦後の西ヨーロッパの事件と、20世紀後半におけるその復興について探究します。いくつかのケースにおいて、本セクションは独裁体制から民主政府への変遷を考察します。各国が直面した社会的、政治的、経済的問題についての国ごとの対処方法と共に、ヨーロッパ統合に向けて各国が互いに受け入れ可能な政治的、経済的、外交的目標をどのように追求したかの考察も必要です。

- ・ 軍事同盟の崩壊／冷戦の発生とそのドイツに対する影響／ドイツの分割
- ・ 西ヨーロッパにおける大戦後の問題および政治的、経済的復興：荒廃と負債／フランスと西ドイツの再建（1945～1963年）およびマーシャル・プランの影響／アデナウアーの役割／ドイツの「経済の奇跡」／ド・ゴールの役割／フランスの「栄光の30年」
- ・ 西ドイツ（1963～1990年）：国内政策／バーダー・マインホフ・グループ／赤軍派の問題／再統合、コールの役割と政策／1949年から1990年までの西ドイツの社会的、文化的変化
- ・ スペイン：フランコ体制および1982年までのフアン・カルロス王政下の民主主義体制への移行と確立／スペインにおける政治的、経済的、社会的発展（1982～2000年）
- ・ 1945年から2000年までの西または北ヨーロッパのいずれか1カ国（フランス、ドイツ連邦共和国、スペインを除く）における政治的、社会的および経済的変化のケーススタディー

18：大戦後の中央および東ヨーロッパ（1945～2000年）

本セクションは、1945年から2000年までの中央および東ヨーロッパの出来事について探究します。これには、ソヴィエト連邦の戦時下の占領から戦後の優位に至る変遷を含みます（チトーのユーゴスラヴィアを除く）。また、ソヴィエト連邦の優位に対する抵抗の範囲と本質にも焦点を当て、ソヴィエト帝国の崩壊の理由についても扱います。最後に、1989年から2000年までの政治的、経済的、社会的発展について考察します。

- ・ ソヴィエトの優位：中央および東ヨーロッパにおけるソヴィエトの覇権の誘因、範囲、特性（1945～1955年）／政治、経済（COMECON）およびワルシャワ条約（1945～1955年）／チトーのユーゴスラヴィアによるソヴィエトの覇権に対する挑戦
- ・ 支持と協力、抑圧と抵抗（1945～1968年）：東ドイツ／ポーランド／ハンガリー／チェコスロヴァキア
- ・ 中央および東ヨーロッパにおけるソヴィエトの覇権の受容と反発（1968～1989年）：東ドイツ／ポーランド／ハンガリーおよびチェコスロヴァキア／ルーマニアとブルガリア／ワレサとハヴェルの役割
- ・ 中央および東ヨーロッパにおけるソヴィエトの覇権の崩壊／原因、展開と結果
- ・ 1990年代のバルカン紛争：紛争の原因と結果／ミロシェヴィッチの役割と政策
- ・ ケーススタディー：中央および東ヨーロッパのいずれか任意の1カ国における共産主義後の経済的、社会的、政治的問題（1989～2000年）

ディプロマプログラムにおける評価

概要

評価は、指導および学習と一体化した要素です。DPでは、カリキュラム目標の達成を支援し、生徒に適切な学習を促すことを評価の最も重要なねらいとして位置づけています。DPでは、学校外で実施されるIBによる外部評価（external assessment）、および内部評価（internal assessment）の両方が実施されます。外部評価のための提出課題はIB試験官が採点します。一方、内部評価のための評価課題は教師が採点し、IBによるモデレーション（評価の適正化）を受けます。

IBが規定する評価には次の2種類があります。

- ・「形成的評価」（formative assessment）は、「指導」と「学習」の両方に指針を与えます。生徒の理解と能力の発達につながるよう、学びの種類や、生徒の長所と短所といった特徴について、生徒と教師に正確で役立つフィードバックを提供します。また、形成的評価からは、科目のねらいと目標に向けての進歩をモニタリングするための情報が得られるので、指導の質の向上にもつながります。
- ・「総括的評価」（summative assessment）は、生徒のこれまでの学習を踏まえて、生徒の到達度を測ることを目的としています。

DPでは、主に履修期間の終了時または終了間近の生徒の到達度を測る総括的評価に重点が置かれています。ただし、評価方法の多くは、指導および学習期間中に形成的に用いることもできます。教師はそうした評価を実施するよう推奨されています。総合的な評価計画は、指導、学習およびカリキュラム編成と一体を成すものです。より詳しくは、IB資料『プログラムの基準と実践要綱』を参照してください。

IBが採用する評価アプローチは、評価規準に準拠した「絶対評価」です。集団規準に準拠した「相対評価」ではありません。この評価アプローチは、生徒の成果を特定の到達の度合いを示す基準に照らし合わせ、そのパフォーマンスを判断するものであり、他の生徒の成果と比較するものではありません。DPにおける評価について、より詳しくはIB資料（英語版）『*Diploma Programme assessment: Principles and practice*（ディプロマプログラムにおける評価：原則と実践）』を参照してください。

OCCでは、DPの科目のコースデザイン、指導、および評価の分野で教師を支援するための多様なリソースを入手できます。また、リソースをIBストア（<http://store.ibo.org>）で購入することもできます。試験問題の見本やマークスキーム（採点基準）、教師用参考資料、科目レポート、評価規準の説明など、その他の資料もOCCで取り扱っています。過去の試験問題やマークスキームはIBストアで購入できます。

評価方法

I Bは複数の方法を用いて、生徒の成果を評価します。

評価規準

評価規準 (assessment criterion) は、オープンエンド型の課題に対して適用されます。各規準は生徒が身につけることが期待されている特定の能力に重点を置いています。評価目標は「何ができるべきか」を明確にし、評価規準は「どの程度よくできるべきか」を到達の度合いを示す基準に照らし合わせて測ります。評価規準を採用することで、個々のさまざまな解答の違いを識別することが可能となり、多様な解答を奨励することにつながります。

各規準には、どのような基準を満たすと特定のレベルに到達していると判断されるのかが詳細に説明されています。その説明は到達レベル別に段階的に並べられ、レベルごとに1つまたは複数の点数が設けられています。また、採点ではベストフィット (適合) モデルを用いて、各規準を個別に適用します。何点はその規準の満点となるかは規準の重要度に応じて異なる場合があります。各規準での得点を合計したものを、その課題に対する総合点とします。

マークバンド (採点基準表)

マークバンド (採点基準表) は、求められる学習成果の基準を一覧にまとめた表です。教師はマークバンドに照らし合わせて、生徒の到達度を判断します。規準ごとに、到達レベルに沿って段階的に到達の度合いを示す基準が並べられています。生徒の学習成果の違いを識別するために、各レベルの点数には幅をもたせてあります。個々の学習成果物にどの点数をつけるかを確定するには、ベストフィット (適合) アプローチを用います。

マークスキーム (採点基準)

この用語は特定の試験問題のために用意された分析的マークスキーム (採点基準) のことを指します。分析的マークスキームは、生徒の最終的な解答や、その他特定の種類の答案を要求する試験問題のために作成されます。これらは、各設問に対する総合点を生徒の解答の異なる部分についてどのように配分するかについて試験官に詳細な指示を与えるものです。このマークスキームには、試験問題の解答で求められる内容や、評価規準をどのように適用するかについての手引きとなる採点のための注意事項などが含まれます。

採点のための注意事項

評価規準を用いて採点される評コンポーネント要素には、「採点のための注意事項」 (marking note) がついている場合があります。採点のための注意事項は、設問に課されている特定の要件に対し、評価規準をどのように適用するかについて指針を示すものです。

受験上の配慮

国際バカロレア^{ディプロマ}資格（IB資格）取得志願者で評価の際に配慮を必要とする志願者は、受験上の配慮を受けることができます。受験上の配慮を設けることで、さまざまなニーズをもつ志願者が最終試験を受験し、評価対象である知識や理解を身につけたかどうかを示すことができます。

IB資料『受験上の配慮の必要な志願者について』には、学習支援を必要とする志願者が受けられる、すべての受験上の配慮についての詳細が記されています。IB資料（英語版）『*Learning diversity within the International Baccalaureate programmes/Special educational needs within the International Baccalaureate programmes*（IBプログラムにおける学習の多様性／IBプログラムにおける特別な教育的ニーズ）』では、IBプログラムにおける多様な学習ニーズをもつ志願者についてのIBの基本方針を概説しています。受験の支障となり得る特別な事情のある志願者については、IB資料『一般規則：ディプロマプログラム』および『DP手順ハンドブック』に対応の詳細が記されています。

学校は学習支援を必要とする志願者に対し、IB資料『受験上の配慮の必要な志願者について』および『IBプログラムにおける学習の多様性／IBプログラムにおける特別な教育的ニーズ』に従って、平等に評価を受けるための配慮と妥当な調整を行わなければなりません。

出典を明らかにする

国際バカロレア^{ディプロマ}資格（IB資格）取得志願者は、IBに提出する評価課題で引用した情報の出典をすべて明らかにしなければなりません。コーディネーターと教師は、このことに留意する必要があります。以下にこの要件について説明します。

IB資格取得志願者は、さまざまな媒体を用いた評価課題をIBに提出します。その中には、出版物または電子情報として公表された視聴覚資料、文章、図表、画像、データなどの引用が含まれている場合があります。志願者は、他人の成果物やアイデアを用いる場合、参考文献目録の書式として標準的とされる一定の書式に従い、出典を明示しなければなりません。志願者が出典の明示を怠った場合、IBは規則違反の可能性があると調査を行います。場合によっては、IB最終資格授与委員会（IB final award committee）による処分の対象となります。

IBは志願者が用いる参考文献目録や本文中の引用の書式については指定せず、志願者の学校の担当者または教師に判断を委ねています。幅広い科目を提供していることや、英語、フランス語、スペイン語の3言語に対応していること、そして多様な参考文献目録の書式があることから、特定の書式を要求することは非合理的かつ制限的です。実際には、ある特定の書式が最も頻繁に使われるかもしれませんが、学校はその科目と使用言語に適した書式を自由に選ぶことができます。その科目のために学校が選ぶ参考文献目録の書式

にかかわらず、著者名、発行日、書名、ページ番号などの最低限の情報は明記する必要があります。

志願者は標準的とされる書式を用い、言い換えや要約を含むすべての参考資料の出典を一貫した書式で明示することが求められます。文章執筆の際、生徒は引用符（または、字下げなどのその他の方法）を用いて自分自身の言葉と他人の言葉を明確に区別し、適切な形で引用を示して参考文献目録に明記してください。電子情報を引用した場合、参考文献目録にアクセス日を明記してください。志願者に期待されているのは、参考文献目録の作成の完璧さではありません。すべての出典を明らかに示すことが求められているのです。志願者は、自分自身のものではない出版物や電子情報として公表された視聴覚資料、文章、図表、画像、データなどもすべて出典を明らかにするように必ず指導を受けなければなりません。この場合も参照・引用の適切な書式を用いてください。

評価の概要 — 標準レベル（SL）

2017年第1回試験

評価の構成	配点比率
外部評価（2時間30分）	75%
試験問題1（1時間） 5つの「指定学習項目」に基づいた資料問題。5つの「指定学習項目」より1項目を選択し、4つの求答形式の問題に解答する。（24点）	30%
試験問題2（1時間30分） 12の「世界史トピック」に基づいた小論文形式の問題。2つの「世界史トピック」に関する2つの小論文形式の問題に解答する。（30点）	45%
内部評価（20時間） この評価要素は教師によって採点され、コース終了時にIBによるモデレーション（評価の適正化）を受ける。 「歴史研究」（historical investigation） 自ら選択したトピックに関する歴史研究を完成させる。（25点）	25%

評価の概要 — 上級レベル（HL）

2017年第1回試験

評価の構成	配点比率
外部評価（5時間）	80%
試験問題1（1時間） 5つの「指定学習項目」に基づいた資料問題。5つの「指定学習項目」より1項目を選択し、4つの求答形式の問題に解答する。（24点）	20%
試験問題2（1時間30分） 12の「世界史トピック」に基づいた小論文形式の問題。2つの「世界史トピック」に関する2つの小論文形式の問題に解答する。（30点）	25%
試験問題3（2時間30分） 4つの地域それぞれに対して別個に用意された試験問題。選択した1地域に関する3つの小論文形式の問題に解答する。（45点）	35%
内部評価（20時間） この評価要素は教師によって採点され、コース終了時にIBによるモデレーション（評価の適正化）を受ける。	20%
「歴史研究」（historical investigation） 自ら選択したトピックに関する歴史研究を完成させる。（25点）	

外部評価

外部評価では、以下の2種類の評価手法が用いられます。

- ・ 各試験問題用の詳細なマークスキーム（採点基準）
- ・ マークバンド（採点基準表）

マークバンド（採点基準表）は、本資料に記載されています。マークバンド（採点基準表）は、「歴史」のために設定された評価目標、および「個人と社会」（グループ3）の成績の評価規準の説明と連動しています。マークスキーム（採点基準）は試験ごとにその試験に準拠して作成されます。

外部評価の詳細

ペーパー 試験問題1（SL・HL）

試験時間：1時間

配点比率：30%（SL）、20%（HL）

「試験問題1」は、「指定学習項目」に基づいて出題される資料問題による試験です。「指定学習項目」はそれぞれ2つの事例研究によって構成されており、各試験ではこれら2つの事例研究のうち1つに焦点が置かれます。

試験では、「指定学習項目」1つにつき4つの資料を使用します。資料は一次資料、または一次資料と二次資料の混合で、文献資料、絵や写真などの視覚資料、図式による資料です。試験は「指定学習項目」1つにつき4つの設問から構成され、生徒は選択した「指定学習項目」に関する4つの設問すべてに解答しなければなりません。1つまたは複数の指定された資料から引き出せる根拠のみに基づいて解答する設問もありますが、その他の設問では、資料に含まれる根拠だけでなく選択した「指定学習項目」に関する自分自身の知識を活用することが要求されます。

設問1、パートA	4つの資料のうちの1つに対する理解度を試験する。	3点
設問1、パートB	4つの資料のうちの1つに対する理解度を試験する。	2点
設問2	1つの資料に関して、その価値と限界を分析する。この分析に際しては、資料の出典、目的、内容に言及することが要求される。	4点

設問 3	2つの資料が「指定学習項目」の特定の側面を研究する歴史学者に対して示すものを比較・対比する。	6点
設問 4	評価を求める設問。この評価に際しては、資料と自分自身の知識の両方を活用することが要求される。	9点

「試験問題1」は24点満点です。採点にあたっては、試験問題に準拠した分析的マークスキーム（採点基準）を使用しますが、各「指定学習項目」の最終設問では、これに加えてマークバンド（採点基準表）も使用します。

外部評価のマークバンド（採点基準表）— 試験問題1（設問4）（SL・HL）

評点	レベルの説明
0	答案が以下のレベル説明の基準に達していない。
1-3	答案が設問の焦点から外れている。 資料への言及はあるものの内容の描写にとどまりがちで、資料が分析を裏づけるための根拠として使用されていない。 生徒自身の知識が示されていない。知識が示されていたとしても、不正確もしくは設問に無関係である。
4-6	答案が設問の趣旨におおむね沿っている。 資料への言及があり、またそれが分析を裏づけるための根拠として使用されている。 生徒自身の知識が示されているが、正確性もしくは設問への関連性に欠ける。 自身の知識と資料を統合する試みがほとんど（あるいはまったく）見受けられない。
7-9	答案が設問の趣旨に沿っている。 資料への言及が明確になされており、またそれが分析を裏づけるための根拠として効果的に使用されている。 正確かつ設問に関連のある知識が示されている。自身の知識と資料が効果的に統合されている。

試験問題2（SL・HL）

試験時間：1時間30分

配点比率：45%（SL）、25%（HL）

「試験問題2」は、12の「世界史トピック」に基づいた小論文形式の試験です。

この試験は、12の「世界史トピック」に対して2つずつ用意された設問によって構成されます。生徒は、異なる「世界史トピック」から選択した2つの設問に解答しなければな

りません。また、この試験における比較形式の設問には、複数地域からの例を必要とするものもあります。なお、「試験問題2」の設問で「地域」という言葉が使われる場合、これは、17 ページ図3に記載された世界地図の4地域のいずれかを指します。

「試験問題2」は30点満点です。採点にあたっては、マークバンド（採点基準表）、および試験問題に準拠した分析的マークスキーム（採点基準）を使用します。

外部評価のマークバンド（採点基準表） — 試験問題2（SL・HL）

評点	レベルの説明
0	答案が以下のレベル説明の基準に達していない。
1-3	設問の要求をほとんど理解していない。小論文に構成が認められないか、認められるとしても設問の焦点から外れている。 設問が扱う世界史のトピックに対する知識がほとんど見受けられない。 議論のために例を挙げてはいるが、事実に間違っているか、設問に無関係、もしくは不明瞭である。 批判的分析がほとんど（あるいはまったく）見受けられない。答案のほとんどが一般論や根拠の不十分な主張で構成されている。
4-6	設問の要求をある程度理解している。答案を体系的に構成しようとした試みが見受けられるものの、明瞭さと一貫性に欠ける。 設問が扱う世界史のトピックに対する知識が示されているが、正確性もしくは関連性に欠ける。表面的なレベルではあるが、歴史的な文脈に対する理解が見受けられる。 議論のために特定の例を挙げてはいるものの、不明瞭であるか、設問への関連性に欠ける。 不十分ではあるが、多少の分析が見受けられる。ただし、答案は記述的・描写的な性質が強く、分析的であるとは言い難い。
7-9	設問の要求を理解しているが、答案ではその要求が部分的にしか満たされていない。答案を体系的に構成しようとした試みが見受けられる。 設問が扱う世界史のトピックに対する知識はおおむね正確であり、設問への関連性もある。歴史上の出来事をおおむね歴史的な文脈に位置づけて論じている。 議論のために選んだ例は適切であり、設問への関連性もある。（設問にとって適切な）比較や関連づけが行われている。 ある程度の分析もしくは批判的論評が見受けられ、答案は記述・描写の域を超えていると言えるが、このレベルが答案全体にわたって維持されているわけではない。

評点	レベルの説明
10-12	<p>設問の要求を理解しており、答案もこれに沿って作成されている。答案はおおむねよく構成されているが、ところどころ繰り返しや不明瞭さが見受けられる。</p> <p>設問が扱う世界史のトピックに対する知識はおおむね正確であり、設問への関連性もある。歴史上の出来事をおおむね歴史的文脈に位置づけて論じており、歴史的概念に対するある程度の理解も見受けられる。</p> <p>議論のために選んだ例は適切であり、設問への関連性もあるうえ、分析・評価を裏づけるための根拠として使われている。(設問にとって適切な)比較や関連づけが効果的に行われている。</p> <p>批判的分析が行われており、その大部分が明瞭で、一貫性もある。異なる視点に対する認識と評価がある程度見受けられる。主要点のほとんどは根拠によって裏づけられており、議論が結論へと論理的につながっている。</p>
13-15	<p>設問の趣旨に的確に沿って答案が作成されており、設問が含意するところとその要求に対する高度な理解も見られる。答案はよく構成され、効果的に整理されている。</p> <p>設問が扱う世界史のトピックに対する知識は正確で、設問への関連性もある。歴史上の出来事を歴史的な文脈に位置づけて論じており、歴史的な概念に対する明確な理解も見られる。</p> <p>議論のために選んだ例は適切であり、設問への関連性もあるうえ、分析・評価を裏づけるための根拠として効果的に使われている。(設問にとって適切な)比較や関連づけが効果的に行われている。</p> <p>明瞭かつ一貫性のある批判的分析が行われている。異なる視点に対する評価が行われており、またこの評価が答案に効果的に組み込まれている。すべての(あるいはほぼすべての)主要点が根拠によって裏づけられており、議論が結論へと論理的につながっている。</p>

試験問題3 (HLのみ)

試験時間：2時間30分

配点比率：35%

HLの4つの地域選択項目にはそれぞれ別個の試験問題が用意されています。生徒はこのうち1つの試験問題に登録します。

地域選択項目の試験問題は、項目内の18のセクションに対して2問ずつ用意された合計36の小論文形式の設問で構成されます。生徒はこのうち3つの設問に解答しなければなりません。なお、設問で言及される国、出来事、人物は、シラバスに記載があるもののみとなります。

「試験問題3」は45点満点です。採点にあたっては、マークバンド(採点基準表)、および試験問題に準拠した分析的マークスキーム(採点基準)を使用します。

外部評価のマークバンド（採点基準表） — 試験問題3（HL）

評点	レベルの説明
0	答案が以下のレベル説明の基準に達していない。
1-3	設問の要求をほとんど理解していない。小論文に構成が認められないか、認められるとしても設問の焦点から外れている。 設問が扱う内容に対する知識がほとんど見受けられない。特定の例に言及しているとしても、事実的に間違っているか、設問に無関係、もしくは不明瞭である。 批判的分析がほとんど（あるいはまったく）見受けられない。答案のほとんどが一般論や根拠の不十分な主張で構成されている。
4-6	設問の要求をある程度理解している。答案を体系的に構成しようとした試みが見受けられるものの、明瞭さと一貫性に欠ける。 設問が扱う内容に対する知識が示されているが、正確性もしくは関連性に欠ける。表面的なレベルではあるが、歴史的な文脈に対する理解が見受けられる。特定の例を挙げてはいるが、不明瞭であるか、設問への関連性に欠ける。 不十分ではあるが、多少の分析が見受けられる。ただし、答案は記述的・描写的な性質が強く、分析的であるとは言い難い。
7-9	設問の要求を理解しているが、答案ではその要求が部分的にしか満たされていない。答案を体系的に構成しようとした試みが見受けられる。 設問が扱う内容に対する知識はおおむね正確であり、設問への関連性もある。歴史上の出来事をおおむね歴史的な文脈に位置づけて論じている。使用した例は適切であり、設問への関連性もある。 ある程度の分析もしくは批判的論評が見受けられ、答案は記述・描写の域を超えていると言えるが、このレベルが答案全体にわたって維持されているわけではない。
10-12	設問の要求を理解しており、答案もこれに沿って作成されている。答案はおおむねよく構成されているが、ところどころ繰り返しや不明瞭さが見受けられる。 設問が扱う内容に対する知識は正確で、設問への関連性もある。歴史上の出来事を歴史的な文脈に位置づけて論じており、歴史的な概念に対する明確な理解も見られる。使用した例は適切であり、設問への関連性もあるうえ、分析・評価を裏づけるための根拠として使われている。 議論はおおむね明瞭で、一貫性もある。異なる視点に対する認識と評価がある程度見受けられる。 批判的分析が行われている。主要点のほとんどは根拠によって裏づけられており、議論が結論へと論理的につながっている。

評点	レベルの説明
13 - 15	<p>設問の趣旨に的確に沿って答案が作成されており、設問が含意するところとその要求に対する高度な理解も見られる。答案はよく構成され、バランスよく効果的に整理されている。</p> <p>設問が扱う内容に対する知識は詳細かつ正確で、設問への関連性もある。歴史上の出来事を歴史的文脈に位置づけて論じており、歴史的概念に対する明確な理解も見られる。使用した例は適切であり、設問への関連性もあるうえ、分析・評価を裏づけるための根拠として効果的に使われている。</p> <p>議論は明瞭で、一貫性もある。異なる視点に対する評価が行われており、またこの評価が答案に効果的に組み込まれている。</p> <p>批判的分析を十分に発展させている。すべての（あるいはほぼすべての）主要点が根拠によって裏づけられており、議論が結論へと論理的につながっている。</p>

内部評価

内部評価の目的

内部評価は授業と一体を成す要素であり、SLとHLのいずれのレベルの生徒も必ず取り組まなければなりません。内部評価課題では、筆記試験でのように時間の制限やその他の制約に左右されることなく、それぞれの興味を追い求めつつ、知識とスキルの活用を示すことができます。内部評価はできる限り通常の授業に織り込まれるべきであり、履修期間の終了後に別途実施されるべきではありません。

なお、内部評価の要件はSLとHLで共通です。すべての生徒は、選択した歴史トピックに関する研究を完了する必要があります。生徒が個人的に興味のあるトピックを選択できるように、内部評価には柔軟性を持たせてあります。トピックはシラバスと関連させる必要はなく、生徒が自主的にトピックを決定することが推奨されます。トピックの選択に自由度があるのは、歴史の研究は特に、個人的に興味のある、すなわち自分の地域や国の歴史に関するトピックに取り組む良い機会であるためです。

注意：各生徒は個々に、歴史の研究を自分自身で完了させる必要があります。グループで1つの研究を行うことはできません。

時間配分

内部評価は「歴史」におけるきわめて重要な要素です。SLにおける最終評価の25%、HLにおける最終評価の20%を占めます。この配点比率を踏まえて、課題に取り組むのに必要な知識、スキル、理解の指導にあてる時間、および課題を進めるために必要な時間を配分する必要があります。

SL・HLともに内部評価課題には、合計約20時間を割りあてるのが推奨されています。この中には、以下の時間を含めるようにしてください。

- ・ 教師が生徒に内部評価の要件を説明する時間
- ・ 授業中に生徒が内部評価課題に取り組む時間
- ・ 教師と各生徒が話し合う時間
- ・ 課題に目を通し、進行状況を確認する時間、および進行状況を確認する時間、および生徒本人が取り組んだ課題であるかどうかをチェックする時間

指導と「生徒本人が取り組んだものであること」の認証

内部評価のために提出される「歴史研究」は生徒自身が取り組んだ学習成果物でなければなりません。しかし、学習成果物が「生徒本人が取り組んだものである」ことは、生徒自身がタイトルやトピックを決め、教師からの支援を一切受けずに、独自に内部評価課題に取り組まなければならないということではありません。教師は、生徒が内部評価課題を計画する段階と取り組む段階で重要な役割を果たします。生徒に以下の点について確実に理解させるのは、教師の責任です。

- ・ 内部評価の対象となる課題についての要件
- ・ 評価規準——評価課題を通じて、生徒は与えられた評価規準に効果的に取り組むべきであること

教師と生徒は内部評価課題について話し合わなければなりません。生徒がアドバイスや情報を得るために率先して教師と話し合うよう促してください。また、生徒が指導を求めたことで減点してはなりません。学習プロセスの一環として、生徒は内部評価課題の**第1稿**を作成した後、教師からアドバイスを受けることができます。ただし、ここで与えられるアドバイスは、どうすれば生徒の取り組みの質を高めることができるかについてであり、教師が第1稿に細かいコメントを大量に書き込んだり、編集を加えたりすることは認められません。なお、この第1稿の次に教師に提出される課題が最終稿となります。

教師には、学問的誠実性に関連する概念、特に知的財産と生徒本人が課題に取り組むことについての基本的な意味および重要性をすべての生徒に確実に理解させる責任があります。教師は必ず、すべての評価課題が要件に沿って取り組まれていることを確認しなければなりません。また、内部評価課題が完全に生徒自身によるものでなければならないことを生徒に対して明確に説明しなければなりません。モデレーション（評価の適正化）、または評価のためにIBに提出されるすべての学習成果物は、本当に生徒本人が取り組んだものであることを教師が認証しなければなりません。また、規則違反の事実またはその疑いがあるとはなりません。各生徒は学習成果物が自分自身のものであること、またそれが最終版であることを正式に認め、内部評価課題のカバーシートに署名をします。なお、署名済みのカバーシートと内部評価課題の最終版を正式に提出した後は、これを撤回することはできません。「生徒本人が取り組んだものであること」の認証は、IB試験官によるモデレーション（評価の適正化）のために提出されるサンプルの課題だけではなく、すべての生徒の課題に必要になります。詳細については、IB資料『学問的誠実性』、『DP：原則から実践へ』および同『一般規則：ディプロマプログラム』の該当するセクションを参照してください。

生徒本人が取り組んだものであるかどうかは、生徒と課題の内容について議論することと、次のいずれか（または2項目以上）を精査することを通じて確認します。

- ・ 生徒の最初の案
- ・ 記述課題の1回目の草稿
- ・ 引用・参考文献

- ・ 生徒自身が書いたものであることが確認されている他の課題との文体の比較
- ・ インターネット剽窃検知サービスによる課題の分析

注意：同一の課題を、内部評価と「課題論文」(E E)の両方の要件を満たすものとして重複して提出することはできないことにご注意ください。

内部評価の詳細 — 標準レベル(S L)と上級レベル(H L)

歴史研究

時間：20時間

配点比率：25% (S L)、20% (H L)

標準レベル(S L)・上級レベル(H L)ともに、生徒は**自分で選択した1トピック**の「歴史研究」を完成させる必要があります。「歴史研究」は3つのセクションで構成されます。



図8

歴史研究

「歴史研究」のトピックは生徒が自由に選択でき、シラバスに関連のないトピックでも構いません。生徒が主体的にトピックを選択するよう促します。ただし、トピックは「歴史」に関するものでなければならず、このため**過去10年以内の出来事を選択することはできません**。

生徒は教師の指導のもとでトピックを選択し、教師の承認を得ます。教師は、生徒が研究を始める前に、トピックと研究課題を承認してください。この際、研究のための資料が十分にあること、研究が内部評価規準で評価できるものであることが、きわめて重要です。また、慎重な取り扱いや機密保持といった、研究にあたって重要な倫理的配慮を生徒が認識するよう促す必要があります。

「歴史研究」は、生徒が授業で学んだ知識やスキルを自分で選択したトピックの研究に応用する機会となります。この課題で重視するのは、具体的な歴史の探究を通して、さまざまな歴史資料の選択や分析、多様な視点の考察といった歴史学のスキルを生徒が習得し応用することです。生徒には、根拠となる情報を自ら探し、選別、評価、活用したうえで、提示した根拠と議論に矛盾しない適切な結論を導き出すことが要求されます。

セクション1：資料の説明と評価

このセクションでは、研究で使用する資料のうち**2つ**を選んで詳細に分析します。資料は一次資料と二次資料のどちらでも構いません。生徒は以下を行う必要があります。

- ・ 研究課題を明確に述べる（質問の形式にまとめます）。
- ・ 詳細な分析の対象として選んだ2つの資料の性質を簡潔に説明する。この際、研究への関連性についても言及する。
- ・ 2つの資料を詳細にわたって分析する。資料の出典、目的、内容に言及しながら、その価値と限界について、研究への関連性という観点から分析する。

内部評価のこのセクションできわめて重要なのは、適切な研究課題を設定することです。この作業の出発点として、「歴史」のコースの6つの主要概念（原因、結果、連続、変化、重要性、視点）が非常に役立ちます。

以下は、最近提出された「歴史研究」の例です。

- ・ 1941年から1942年にかけて行われたデュッセルドルフからミンスクへのユダヤ人の移送は、どの程度、体系的なものだったか。
- ・ バンベルクの魔女裁判（1623-1633年）の原因として、経済問題はどの程度大きな要因だったか。
- ・ マーケット・ガーデン作戦の失敗の最大の理由は何か。
- ・ 紀元前2125年に起きたエジプト古王国の崩壊は、統率力の弱さにどの程度起因していたか。

セクション2：研究

このセクションは、実際の研究です。「歴史」の内部評価課題では、以下の例のように、さまざまなタイプの歴史研究を行うことができます。

- ・ さまざまな文献資料やその他の多様な資料を用いて、具体的な歴史のトピックやテーマを研究する
- ・ 博物館、遺跡、戦場跡、モスクや教会などの礼拝の場、歴史的建造物などでのフィールドワークに基づいて、具体的な歴史のトピックを研究する
- ・ 地域史を研究する

研究は明確かつ効果的に構成されなければなりません。このセクションのための指定のフォーマットはありませんが、研究課題に明確に沿った批判的分析と、分析から導き出される結論は必ずこのセクションに含めるようにしてください。

このセクションでは、生徒が自らの議論を補強するためにさまざまな根拠を使用する必要があります。一次資料と二次資料の両方を使用することができます。

セクション3：考察

このセクションでは、歴史学の方法論や歴史学者が直面する課題について、自身の研究から明らかになったことを考察します。

この考察にあたっては、以下のような問いが役立つでしょう。

- ・ 自分の研究で、歴史学者の使用するどのような方法を用いたか。
- ・ その方法の限界について、自分の研究でどのようなことが明らかになったか。
- ・ 歴史学者はどのような課題に直面しているか。歴史学者の課題は、科学者や数学者の課題とどのように異なるか。
- ・ 文献を基本とする歴史研究には、特にどのような課題があるか。
- ・ 情報源の信頼性は、どのようにして評価できるか。
- ・ 「偏った考え方」と「選択的な意見を持っていること」の違いは何か。
- ・ 歴史上の出来事は、どのような要素で構成されるか。
- ・ どの出来事が歴史的に重要なかを、決めるのは誰か。
- ・ 歴史上の出来事を偏向なく客観的に説明することは可能か。
- ・ 歴史学者の役割とは何か。
- ・ 歴史の記述において「残虐行為」のような言葉を使用すべきか。それとも価値判断を示唆するような言葉は避けるべきか。
- ・ 歴史の証拠を確立することが難しい場合、すべての解釈が同等に容認されることを意味するのか。

参考文献目録

すべての資料の出典を必ず明らかにし、参考文献目録に記載しなければなりません。参考文献目録は、全体の語数（字数）には計上されません。

語数（字数）の制限

「歴史研究」の語数（字数）制限は2200語（日本語の場合は4400字）です。すべての資料の出典を必ず明らかにし、参考文献目録に記載しなければなりません。この部分は全体の語数（字数）には計上されません。

「歴史研究」の各セクションの語数（字数）配分の目安は以下のとおりです。ただし、これらはあくまでも目安であることに留意してください。

セクション	語数（字数）配分の目安	関連する評価規準	配点
1. 資料の説明と評価	500語（1000字）	A. 資料の説明と評価	6点
2. 研究	1300語（2600字）	B. 研究	15点
3. 考察	400語（800字）	C. 考察	4点
参考文献目録	適用外	なし	なし
語数（字数）合計の上限	2200語（4400字）		合計：25点

補足

内部評価課題についての補足説明は、I B 資料『「歴史」教師用参考資料』を参照してください。

内部評価への評価規準の適用

内部評価には、多くの評価規準が設けられています。各評価規準には、学習成果物が特定のレベルに到達している場合にその成果物に見られる特徴を記述した「レベルの説明」と、それに対応する点数が明示されています。「レベルの説明」では、基本的に学習の成果として捉えられる肯定的な側面を判断基準として取り上げています。ただし、下位の到達レベルでは、達成できなかった点を判断基準としている場合もあります。教師がSLおよびHLの内部評価課題を採点する際は、評価規準の「レベルの説明」に照らし合わせて判断しなければなりません。

- ・ 評価規準は、SL・HL共通です。
- ・ ベストフィット（適合）モデルの考え方にに基づき、「レベルの説明」から、生徒の到達レベルを最も適切に示す説明を見つけます。学習成果物に見られる到達度が規準に示されている要素によって異なる場合、補正するというのがベストフィット（適合）アプローチの考え方です。与えられる点数は、規準に照らし合わせた場合に、到達レベルのバランスを最も公正に反映するものでなければなりません。「レベルの説明」に挙げられている要素をすべて満たさなければ、その点数が得られないということではありません。
- ・ 生徒の学習成果物を評価する際、教師は、評価規準で学習成果物のレベルを最も的確に示している説明と一致するまで、各レベルの説明を読まなければなりません。学習成果物が2つの説明のちょうど中間にあたると見られる場合、両方の説明を読み直し、生徒の学習成果物をより適切に示す方を選ばなければなりません。
- ・ 1つのレベルに複数の点数が割りあてられている場合、生徒の学習成果物について、説明内容を達成している度合いが大きければ（学習成果物はその上のレベルに到達しそうな場合）、高い方の点数をつけます。説明内容を達成している度合いが小さければ（その下のレベルに近い場合）、低い方の点数をつけます。
- ・ 整数のみを用います。分数や小数を用いた点は認められません。
- ・ 教師は合格・不合格の線引きをするような考え方をせずに、各評価規準において、学習成果物を最も適切に表すレベルを判別することに専念しなければなりません。
- ・ 「レベルの説明」にある最上位レベルは、欠点のない完璧な学習成果を意味するものではありません。規準は、生徒が最上位レベルに達することができるように設定されています。その学習成果物が最上位レベルの説明内容にあてはまるのであれば、教師は最高点をつけることを躊躇してはなりません（最低点についても同様です）。
- ・ 1つの規準において到達レベルの高かった生徒が、他の規準においても到達レベルが高いとは限りません。同様に、1つの規準において到達レベルの低かった生徒が、

他の規準においても到達レベルが低いとは限りません。教師は、生徒の全体的な評価からある特定の点数をその生徒の得点として想定するべきではありません。

- ・ 評価規準を生徒に示すことが推奨されています。

内部評価規準 — 標準レベル（SL）・上級レベル（HL）

「歴史研究」は、標準レベル（SL）・上級レベル（HL）ともに3つの規準で採点されます。

- ・ 規準A：資料の説明と分析（6点）
- ・ 規準B：研究（15点）
- ・ 規準C：考察（4点）

内部評価規準（SL・HL）

規準A：資料の説明と分析（6点）

評点	レベルの説明
0	成果物が以下のレベル説明の基準に達していない。
1-2	研究課題が述べられている。適切な資料を特定・選択しているが、研究との関連性がほとんど（あるいはまったく）説明されていない。 2つの資料の説明はあるが、分析と評価が行われていない。
3-4	適切な研究課題が述べられている。適切な資料を特定・選択しており、研究との関連性もある程度説明されている。 2つの資料の分析と評価がある程度見受けられるが、資料の価値と限界についてはわずかな言及にとどまっている。
5-6	適切な研究課題が明確に述べられている。適切で関連性のある資料を特定・選択しており、研究との関連性も明確に説明されている。 2つの資料の詳細な分析と評価が行われており、出典、目的、内容に言及したうえで、その価値と限界を明確に議論している。

規準B：研究（15点）

評点	レベルの説明
0	成果物が以下のレベル説明の基準に達していない。
1-3	研究が明瞭さと一貫性に欠け、構成が認められないか、認められるとしても研究の趣旨から外れている。 批判的分析がほとんど（あるいはまったく）行われておらず、ほとんどが一般論や根拠の不十分な主張で構成されている。資料から得られる根拠について言及しているが、その根拠の分析は行われていない。

評点	レベルの説明
4-6	<p>研究を体系的に構成しようとした試みが見受けられるが、部分的なレベルにとどまっていて、明瞭さと一貫性を欠いている。</p> <p>不十分ではあるが、多少の批判的分析が見受けられる。ただし、総じて記述的・描写的な傾向が強く、分析的であるとは言い難い。資料から得られる根拠について言及しているが、分析や議論に統合されていない。</p>
7-9	<p>研究はおおむね明瞭で、まとまった構成になっている。ただし、ところどころ繰り返しや不明瞭が見られる。</p> <p>ある程度の分析や批判的論評が見受けられ、内容は記述・描写の域を超えていると言えるが、このレベルが全体にわたって維持されているわけではない。資料から得られる根拠を分析や議論に統合しようという試みが見受けられる。</p> <p>異なる視点が存在することを認識しているかもしれないが、その評価は行われていない。</p>
10-12	<p>研究はおおむね明瞭で、まとまった構成になっている。ただし、ところどころ繰り返しや不明瞭が見られる場合もある。</p> <p>明瞭さに欠けるところや発展が不十分なところはあるものの、批判的分析が行われている。さまざまな資料から得た根拠を、議論を補強するために使っている。</p> <p>異なる視点が存在することを認識しており、その評価もある程度見受けられる。議論が結論へと論理的につながっている。</p>
13-15	<p>研究は明瞭で一貫性もあり、効果的に構成されている。</p> <p>十分に発展された批判的分析が、研究課題に明確に沿って行われている。さまざまな資料から得た根拠を、議論を効果的に補強するために使っている。</p> <p>異なる視点の評価が行われている。前段の議論や提示した根拠に合致する論理的な結論が述べられている。</p>

規準C：考察（4点）

評点	レベルの説明
0	<p>答案が以下のレベル説明の基準に達していない。</p>
1-2	<p>歴史学の方法論について、研究から何が明らかになったかをある程度論じている。</p> <p>歴史学者が直面する課題や歴史学の方法論の限界について、理解がほとんど見受けられない。</p> <p>考察と他のセクションとのつながりが示唆されてはいるが、明確でない。</p>
3-4	<p>歴史学の方法論について、研究から何が明らかになったかを明確に論じている。</p> <p>歴史学者が直面する課題や歴史学の方法論の限界について、明確な理解が見受けられる。</p> <p>考察と他のセクションとのつながりが明確に示されている。</p>

ディプロマプログラム「歴史」の指導と学習のアプローチ

ディプロマプログラム（DP）の指導と学習のアプローチとは、指導と学習の場に浸透する綿密なストラテジー、スキル、姿勢です。「IBの学習者像」と本質的にリンクするこれらのアプローチとツールは、生徒の学習の質を高めると同時に、DPの最終評価やその先の学びのための基礎をつくります。

5つの「学習のアプローチ」（思考スキル、社会性スキル、コミュニケーションスキル、自己管理スキル、リサーチスキルを養うこと）と、6つの「指導のアプローチ」（探究を基本とした指導、概念に重点を置く指導、文脈化した指導、協働に基づく指導、生徒の多様性に応じて差別化した指導、評価の情報に基づく指導）は、IBの教育を支える重要な価値観と基本原則に根ざしています。指導と学習のアプローチについての詳細およびサポートは、この手引きの以下のページとIB資料『「歴史」教師用参考資料』を参照してください。

DPの「歴史」は、内容、概念、スキルという3つの主要素に基づいて構成されています。これら3つの要素は不可分な関係にあると考えられています。

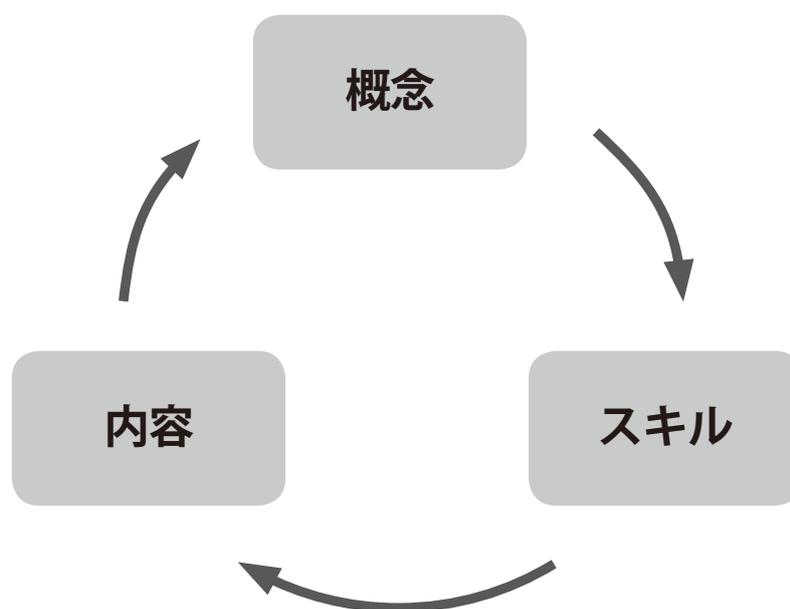


図9

3つの主要素

このような「3次元の」モデルは、「複数の学問領域にわたる重大な事実に基づく知識という確たる基礎に価値を置く一方で、概念レベルの理解に重点を置くことになるためカリキュラムと指導に求められる水準はより高いものになります」（Erickson, 2012）。

- 概念** 「概念」とは、大きなレベルの有力な思考であり、科目の領域内と領域外の両方において重要です。概念は、「既存のスキーマと認知的枠組みに知識を統合させる」(Anderson, Krathwohl 2001) ことにより、生徒を「知識」から「理解」のレベルへと導きます。また、古い知識と新しい知識の間の架け橋になるとともに、異なる科目領域間や文脈間での知識の行き来を促す役割も担います。あるトピックの背後に存在する「大きなレベルの思考」を理解することは、「なぜそのトピックを学ぶのか」という問いの核心へと生徒を導きます (Perkins 2010 などの文献を参照してください)。
- 内容** DPの「歴史」では、「内容」も非常に重要な役割を担います。概念的な理解をもつには、「事実に基づく知識」という確たる基礎が必要になるためです。また、具体的な例や事例研究は、抽象的な概念を具体的に示し、概念を特定の文脈に置いて考えるのに役立ちます。
- スキル** DPの「歴史」の学習を通じて、生徒は、歴史学の方法論とその実践についての理解を身につけるよう促されるべきです。歴史学のスキルを指導することは、歴史に対する生徒の理解を深めるだけでなく、将来そのスキルを歴史学や関連分野の研究で応用する足場をつくります。これらのスキルは、単独で扱うのではなく、文脈に応じた適切なやり方で、シラバス全体を通じて導入していくことがきわめて重要です。

DPの「歴史」で使用する主要概念の詳細

DPの「歴史」では、原因、結果、変化、連続、重要性、視点という6つの主要概念に重点を置いています。歴史教育の研究者らは、この種の概念が私たちの歴史に対する考え方を形成するうえで重要な役割を果たすと論じて、歴史の理解の中心に「考える」行為を置いてきました (Seixas and Morton 2013)。これらの概念を用いることにより、生徒は、歴史の問題について批判的に思考できるようになります。具体的には、過去の主張や当事者たちや論点について、生徒が自ら問題を特定して解決し、意思決定を下して、判断を形成するのに役立ちます。また、これらの概念は、歴史の教師にとってもきわめて有益なツールです。創造性に富んだ授業と評価のアクティビティを計画して、決められた内容を受動的に受け取るのではなく、生徒が既存の知識に基づいて歴史の問題や歴史上の出来事について深く考える機会をもたらすためです。

<p>変化</p>	<p>歴史の学習には、人々や出来事がもたらす変化の度合いを研究するという側面が含まれます。「変化」という概念を議論することによって、例えば「変化がなかった」と主張されている局面で本当に変化がなかったのかどうかを考察し、その変化を見つけようとしたり、逆にある人や出来事が重要な変化をもたらしたとされている局面で、具体的な根拠を用いて定説となっている理論や仮定に疑問を投げかけたりするなどの、高度な議論が促されます。歴史上の変化に対する生徒の質問や判断は、内容を深く理解し、かつその出来事の前後の状況を比較したうえで形成されなければなりません。</p>
------------------	--

<p>連続</p>	<p>歴史の学習ではしばしば、重大な変化が起こった局面に焦点があてられますが、変化のなかにはゆっくりと長い時間をかけて起こるものもあり、また歴史には重大な「連続性」があることも、生徒は認識しなければなりません。例えば、歴史上の大きな変化のただ中であってなおも相当の連続性が存在した時代があったという認識を示すことにより、生徒は、歴史に対する深い知識と理解を証明することができます。また、例えば外交政策に変化があった局面で、政治指導者の交替がそれをもたらしたのか、むしろ前政権の政策を映し出した結果だったのかを、生徒は問いかけ、考察することができます。</p>
<p>原因</p>	<p>歴史学的見地から論理的に思考できる人は、過去に関する主張の多くが「ある一連の出来事がなぜ起こったのか」をより徹底的に説明し理解しようとする試みであることを認識しています。歴史を深く理解している生徒は、歴史上の出来事のほとんどが多様な原因の相互作用によって起きるものであり、そのなかでどの原因が重要かつ重大だったか、どの原因が個人レベルでコントロールできたか、またはできなかったかについて、根拠に基づいて判断することが要求されるという認識をもっています。</p>
<p>結果</p>	<p>歴史を学ぶということは、過去の事象がその後の社会や人々にどのように影響したかを理解するということです。歴史学的手法を用いて論理的に思考できるようになった生徒は、歴史上の重要な出来事や人物が及ぼした短期的、長期的な影響の両方を理解し、説明することができます。その出来事や人物についての証拠と解釈を用いて、歴史上の異なる時点での比較を行い、それらの事象が長期にわたる重要な影響をどの程度もたらしたかを判断します。</p>
<p>重要性</p>	<p>歴史とは、単に過去の出来事をすべて記録する学問ではありません。むしろ、過去の証拠や痕跡を通じて保存された記録であって、誰かが意図的に記録・伝達しようとした過去の側面だと言うことができます。このため、なぜある側面が記録され歴史に組み込まれることになったのかを問いつけるよう、生徒に奨励すべきです。同様に、どの人物、どの出来事が歴史から除外されたのか、なぜ除外されたのかも考察するよう、奨励すべきです。さらに、生徒の質問は、歴史上の出来事、人物、集団、展開の相対的な重要性、ひいてはその重要性に関するこれまでの主張が根拠に基づくものかどうかを考察・評価するよう促すような質問であるべきです。</p>
<p>視点</p>	<p>歴史は時として、他の視点を考慮に入れない偏った「国家神話」とも言える壮大なストーリーを広めるためや、特定の視点を優位に立たせるために、利用もしくは乱用されることがあるという認識を、IBの生徒はもたなければなりません。生徒は、過去に対する複数の視点に対して疑問を投げかけ、批評し、比較し、根拠に基づいた裏づけを行うよう奨励されます。また、過去に記録されたすべての出来事に対して、異なる視点や反対の視点があり得ることを認識すべきです。さらに、社会的少数者や女性をはじめ、さまざまな人々が過去の同じ出来事に臨んでどのように異なる経験をしたかを、一次資料の情報や歴史学者の見解を用いながら調査・比較することもできます。このような学習を通じて複数のものの見方を探究することと国際的な視野の育成の間には、とりわけ深いつながりがあります。</p>

スキル

DPの「歴史」は、DPの他のすべてのコースと同様に、生徒の思考スキル、リサーチスキル、コミュニケーションスキル、ソーシャルスキル、自己管理スキルを高めるための豊かな機会をもたらします。これら5つのスキルを向上させるための詳しい情報は、IB資料『「歴史」教師用参考資料』を参照してください。ここでは、「歴史」の学習を通じて育成されるスキルについて4つの例を紹介します。

例1：歴史的根拠の収集と分類

DPの「歴史」の学習を通じて養われるスキルの多くは、歴史的根拠の収集と分類に関連しています。これには、以下のようなリサーチスキルが含まれます。

- ・書籍、論文、ウェブサイト、視聴覚資料から関連性のある適切な証拠を探し、選び出すこと
- ・さまざまな種類の証拠の違いを認識すること

「歴史」の学習を通じて、生徒は、多様な歴史資料を見つけて使用するうえで必要となる自信と主体性を向上させることができます。

例2：歴史的根拠の評価

DPの「歴史」の重要な要素のひとつが、歴史的根拠の評価に必要な思考スキルとリサーチスキルの向上に関連しています。これには、以下のようなスキルが含まれます。

- ・歴史的根拠の主観性を認識すること
- ・資料を吟味して、関連する、補完する、または矛盾する情報や解釈や事例を見つけること
- ・資料の価値と用途を認識し、なぜ歴史資料は慎重に扱わなければならないのかを理解すること
- ・歴史の見解や解釈には相違があることを認識し、どのように異なるのか、なぜ異なるのかを理解すること

「歴史」の学習を通じて、生徒は、複数のものの見方、歴史的見解、解釈に対する認識を高めることができます。

例3：歴史上の過程が人間の経験や活動や動機とどのような関係にあるかについての認識と理解

DPの「歴史」の学習を通じて、生徒は、幅広い文脈で「人間の経験の本質」というものに対する価値を認められるようになります。これは、以下のようなスキルに重点を置くことにより、達成することができます。

- ・原因と結果を認識、説明、分析すること
- ・時代の流れとともに起こった変化や発展、または連続性を認識、説明、分析すること
- ・類似点や相違点を認識、説明、分析すること
- ・歴史上の人間の活動、経験、動機をさまざまな文化的・社会的側面に関連づけること
- ・さまざまな時代と地域で学習した資料を統合的に扱うこと

例4：歴史的な思考や情報の整理と表現

DPの「歴史」では、歴史的な思考や情報を体系的に整理して明確に表現するためのコミュニケーションスキルの育成が重視されます。これには、以下のようなスキルが含まれます。

- ・問いや仮説を立てて、解答・検証すること
- ・ある問いを探究するために複数の資料を使用し、統合的に扱うこと
- ・情報や考えを適切に選び出し、効果的に使うこと
- ・見解や分析、さらに関連する実証を使用して、歴史的な「語り」を構築すること
- ・要約し、結論を導き出すこと

これらのスキルを養うことにより、口述と記述の両方のコミュニケーションが向上し、生徒の自信にもつながります。

指示用語の解説

用語の解説

生徒は、試験問題で使用される次の重要な指示用語および表現に慣れておく必要があります。指示用語は以下の定義に基づいて、理解されなければなりません。これらの用語は試験問題に頻出しますが、それ以外の用語を用いて、生徒に特定の方法で議論を展開するよう指示する場合があります。

用語	評価目標レベル	意味
分析しなさい Analyse	AO2	本質的な要素または構造を明らかにするために分解しなさい。
比較しなさい Compare	AO3	2つ（またはそれ以上）の事柄または状況の類似点について、常に双方（またはすべて）について言及しながら、説明しなさい。
比較・対比しなさい Compare and contrast	AO3	2つ（またはそれ以上）の事柄または状況の類似点および相違点について、常に双方（またはすべて）について言及しながら、説明しなさい。
対比しなさい Contrast	AO3	2つ（またはそれ以上）の事柄または状況の相違点について、常に双方（またはすべて）について言及しながら、説明しなさい。
論じなさい Discuss	AO3	さまざまな議論、要因、仮説を考慮し、バランスよく批評しなさい。意見または結論は、適切な根拠を挙げて、はっきりと述べなさい。
評価しなさい Evaluate	AO3	長所と短所を比較し、価値を定めなさい。
考察しなさい Examine	AO3	論点の前提や相互関係が明らかになるように、議論または概念について考えなさい。
どの程度 To what extent	AO3	議論または概念の長所または短所を検討しなさい。意見および結論ははっきりと提示し、適切な証拠および論理的に正しい論拠をもたせなさい。

参考文献

以下の資料は、『「歴史」指導の手引き』（2017年第1回試験）の刊行に伴う改訂に用いた主な参考文献です。入手可能な文献をすべて網羅したものではありません。教師にとって特に役立つと思われるものを取り上げています。なお、以下は、教科書として推薦する図書のリストではありません。

- Anderson, LW and Krathwohl, DR (eds). 2001. *A Taxonomy for Learning, Teaching, and Assessing: A Revision of Bloom's Taxonomy of Educational Objectives*. New York, USA. Longman.
- Arthur, J and Phillips, R (eds). 2000. *Issues in History Teaching*. London, UK. Routledge.
- Davies, I (ed). 2010. *Debates in History Teaching*. London, UK. Routledge.
- Erickson, HL. 2012. *Concept-based teaching and learning*. IB position paper. Cardiff, UK. International Baccalaureate Organization.
- Headrick, D. 2009. *Technology: A World History*. New York, USA. Oxford University Press.
- Nakou, I and Barca, I (eds). 2010. *Contemporary Public Debates Over History Education*. Charlotte, North Carolina, USA. Information Age Publishing.
- Perkins, D. 2010. *Making Learning Whole: How Seven Principles of Teaching Can Transform Education*. San Francisco, California, USA. Jossey-Bass.
- Seixas, P. 2009. "National history and beyond". *Journal of Curriculum Studies*. Vol 41, number 6. Pp 719–722.
- Seixas, P and Morton, T. 2013. *The Big Six Historical Thinking Concepts*. Scarborough, Ontario, Canada. Nelson College Indigenous.
- Stearns, P. 2010. *Globalization in World History*. Abingdon, UK. Routledge.
- Walker, G, (ed). 2011. *The Changing Face of International Education: Challenges for the IB*. Cardiff, UK. International Baccalaureate Organization.
- Wineburg, S. 2001. *Historical Thinking and Other Unnatural Acts: Charting the Future of Teaching the Past*. Philadelphia, Pennsylvania, USA. Temple University Press.
- Yerxa, D (ed). 2008. *Recent Themes in Historical Thinking: Historians in Conversation*. Columbia, South Carolina, USA. University of South Carolina Press.